

実用性のある伝統と革新性

— The practical tradition with the innovative progress —

畑中邦道

要 旨

伝統的な慣習、文化、事業は、そのプロセスが便益性や経済価値を生み出す実用性に富んでいなければ、継続性を失うだろう。宗教的な文化が圧倒的な伝統を維持しているのは、内部環境と外部環境の間で集団の共同主観性が成立しているか、信じている自由意志に共通な価値観が成立しているからだと考えられる。社会慣習を拠り所とする伝統では、風習や制度に依存していることが多い。伝承されるコンテンツは、外部環境の変化にレジリエンスを発揮できなければ、継続的な実用性を失うだろう。経営力が問われる職人技や老舗という信頼性やブランドを継承する事業では、革新性を内部環境に持たなければ、進化し続ける外部環境からは適切なフィードバックが得られず、継続性は絶たれるだろう。時間、知識、エネルギー、技術、蓄積、満足度等に伝承可能な価値を生み出し続けなければ、継続はなされない。AI（人工知能）時代を迎え、シンギュラリティさえ現実味を帯びて議論されるほど、環境は急速に変化し続けている。実用性のある伝統には、どんな革新性が求められるのだろうか。

キーワード：実用性、革新性、伝統、継続性、価値観、伝承

1. はじめに

「伝統的」という「ことば」を使うとき、我々は、なんとなく歴史的に継承してきた「何か」を感じとっていて、その「何か」が実践的な継続性をもっていることに気付く場合が多い。集団は伝統の価値を共有できていると信じており、共同主観性が成立していると認めているような気がする。人類はコミュニケーションの道具の一つである「ことば」によって価値観を共有できている。価値観を共有している集団の内部では、個々人が持つ五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚）によって漠然とはしていても、あるイメージをもった主体は、客観的主体を継承できているのではないだろうか。「ことば」によって内部が共有できている価値観の伝承と伝播は、伝統を継続する場面では、大きな役割を果たしていると思われる。

「ことば」の共有がなされていない外部の集団との間では、持っている五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚）は同じであっても、体感を含めて感じている本質を「感じとる味わい」に、心象的な違いや認識の違いが生じていると思われる。海外から日本を訪れている人々と生活空間を共にすると、海外の人々のマナーに違和感を覚えることがある。違った伝統から生み出された慣習や価値観の違いが、そう感じさせているのではないだろうか。だからといって、日本人の行動様式がマナーのグローバル標準になっているわけではない。日本人が海外を訪れた時、初めて訪れる国であれば、少なからずカルチャーショックを自覚するはずである。文化に差があると気づくことは、逆にいえば、日本の価値観がグローバル標準ではないことを自覚できることでもあろう。

伝統的であるということイメージできる継続性には、伝統が伝承され伝播されるコンテンツを含め、客観的な蓋然性を示す実用性が発揮できている必要があるだろう。心象を含めた「本質」の継続性が先か、あるいは外形的継続性の「実存」が先かといった、主観や自覚からの検討も必要となるだろうが、客観的蓋然性に確信が持てるという「信じている」かどうか、ということも重要となるだろう。主観的であれ客観的であれ、過去から現在に至るまで、内部環境と外部環境の間で交換されている価値が、と

もに実用性を認められていなければ、その伝承が伝統的であるとは、いえそうにはない。では、価値を継続的に生み出し続けている実用性は、どのように伝承されているのであろうか。

伝統的な実践が継承され実用性を維持していくには、内部環境は外部環境である時代の推移に適応力を持ち、適切なきに適切なバランスを取ることが可能にするレジリエンス（Resilience）が求められそうだ。伝統を維持しているレジリエンスには、多様性に富んだ内部環境と外部環境が存在し続けていて、適切なフィードバックが相互に掛かっており、環境変化や革新性を吸収できる復元力を持っている必要性がありそうだ。

継承に持続性を持たせるには、外部環境にある豊富な多様性を、常に内部に取り入れる仕組みが必要になるだろう。外形的な「モノ」であれ、心象的な「こころ」であれ、過去をそのまま引き継ごうとすればするほど、伝統は変化が急な外部環境には追いつけず、硬直化してしまうだろう。硬直化すれば、伝承がなされたとしても、次世代では実用性は発揮できないであろう。実用性を失わないためには、伝統の内部にあるコンテンツの多様性を増やすための自己努力が必要であろうし、価値の蓋然性を持つ交換様式に価値を成立させるためには、伝統自身しか創り出せない自己革新性も求められるはずである。

いつの時代においても、伝統が伝統たり得るには、時間、知識、エネルギー、技術、質の蓄積、満足度、等に継続的な価値を生み出し続けなければ、伝播や継承は経済的な価値さえ生み出さず、再生も再現もできず、レジリエンスを回復することはかなわず、文化的な意義さえも失うだろう。現在の環境は、良くも悪くも急速に変化を加速させている。すでに、我々は、AI（人工知能）の時代に身を置き、シンギュラリティさえ現実味を帯びて議論されている。伝統が継続性を維持し、次世代に引き継がれることを可能とするには、現在の実用性に革新性が必要とされそうである。本論では、主に日本的な伝統の価値観に焦点を当て、実用性とは何か、内部の革新とはどのようなものなのか、考察を進めてみる。

2. 伝統の内部性

2.1 伝承と伝播

「ことば」をコミュニケーションの道具としている集団では、同一の「ことば」による伝承や伝播が起き、集団の内部性を高めるネットワークに慣れ親しんでいることによって、集団内の環境を居心地がよい場と感じていることが多いと思われる。居心地の良さだけで、勝手に個々の集団の持つ慣習が正しいマナーと思い込んでいる可能性もあるだろう。社会慣習が色濃く伝承される行儀や作法や身だしなみについては、その集団が「そうあるべき」と外形的に継承してきた伝統を、実用性があると単に信じ込んで伝承しているだけかもしれない。

宗教的な文化が圧倒的な伝統を維持しているのは、「信じている」ということから生まれる伝承と伝播が、大きな影響力と経済力を生み出す原動力となっていると思ってもよいだろう。「信じている」という人間にしかない「こころ」の伝承は、貨幣の伝統でも共通している。宗教的な内部性がネットワーク外部性に伝播し拡散すると同様、他人が「信じている」から「自分も信じる」、という幻想主観性に近い環境を造り出している。貨幣経済では、交換様式の単なる媒体としての機能を持っているだけなのに、価値を「信じる」ということに同意し、共有している。人類ならではの不思議な共同主観性である。この共同主観性について、Y, N, ハラリーは、『サピエンス全史』（上）の中で、“宗教は特定のものを信じるように求めるが、貨幣は他の人々が特定のものを信じていることを信じるように求めるからだ。”¹と、表現している。

社会的な仕組みは、宗教心に依存しているわけではなく、自国の貨幣は、経済的価値を交換できる媒体だと「信じている」ということで成立している。政治的な統制や覇権では、新しい文化を創り出しているという思い込みを「信じている」ことによって、思想や行動に強制力を持たせていることも起きている。イデオロギーにより、人為的に実用性があるように思い

¹ Y, N, ハラリー (2011)、(2016,9)、柴田裕之訳、『サピエンス全史』（上）、河出書房、230

込ませることができるからである。国際環境に危機感さえ生み出している中国による強者から弱者への借款という形の経済支援は、強者による新しい伝統を国際関係に創り出そうとしているようにも見える。

思い込みを持つ集団が経済的な優位性をもてば、価値の交換様式を使って、経済的弱小国に対して経済援助という名目で支援し、結果的に相手国を債務国に落とし込むことが可能である。一方的な強制力の行使は、スリランカのハンバントタ港建設債務が港湾施設の99年間の租借権行使に置き換わったように、弱小のアフリカ諸国相手や東南アジアの途上国の諸国で、既に起きている。一方的な強制力の行使は、弱者である国が持つ文化的な集団の内部性をも崩壊させる危険性がある。文化が維持できなくなることは、その国あるいは集団のアイデンティティを失うことでもある。強制力を持つ勢力が、弱小国の伝統を弊害であると断定すれば、強制力によって伝統は崩壊させることができる。

ある慣習が始まったと思われる歴史的な時代の背景には、何らかの実用性があったから始まったと考えてよいであろう。ある集団の伝統が内包していると思われるコンテンツや伝承のプロセスが持つ決まりごとは、外部の異なる価値観を持った集団にとってみれば、少なからず共同主観性の共有がなされていなければ、具体的な便益性や価値の交換性を見出せないであろう。感性のみに頼る価値観の相対的な評価だけでは、価値観を共有することは難しい。「ことば」が違えば、外形的な説明は可能であっても、本質である実質について「こころのあり処」を表現することは難しい。価値観を内部と外部で共有できなければ、集団の内部性が維持してきたネットワークによって継承されてきた文化は、外部への伝播を起こすことはできないだろうし、外部が内部より、より多くの多様性を豊富に持っていない限り、外部は内部の多様性を知ることは不可能なので、ネットワーク外部性による拡散も期待できないだろう。

共同主観性が共有されている集団と集団の間では、共有しているネットワークを通じて慣習やマナーが守られ、集団間の社会的秩序が保たれていると考えてよいだろう。社会的な価値観や文化的な価値観を、異なる他の集団が認識しようとする場合、認識の対象となる集団の持つ特徴量や概念

の構造を、異なる集団は充分理解できている必要がある。伝統文化の実用性がどこにあるのかを見つけ出すためには、他の集団は、より多くの豊富な多様性を持っている必要があるだろう。多様性を認めないイデオロギーによって、文化の伝統が持っている実用性や有用性を一方的に破棄させてしまうような、乱暴な人為的な行動様式は、人類にとっては総合的な多様性を失うことに繋がり、損失は大きくなるのではないだろうか。

2.2 継続と革新

伝統的といわれる職人技や、老舗とよばれる伝承が価値を持っていると思われる事業や、個々あるいは地域のブランドを継承する事業体では、事業の経営は実践的であると同時に、今、この瞬間にも実用的であり続けている必要があるだろう。実践は、常に結果で評価されるので、実用性や希少性が評価されない事業では価値の交換は実現しないだろう。価値の交換によって事業継続を可能とする外部から内部への原資の還流は、売買のような形で外部からもある程度は観察できるが、意図から始まる実践という内部のプロセスは、いつも事業の内部者にしか見えていない。実践の伝承は、内部にしかない意図された行動によって得られる外部からの価値の交換を通じて得られた原資の蓄積を引き継ぎ、伝統のプロセスが外部環境の変化に見合った仕組みになるように、常に再投資されなければ、事業継続は起きないだろう。意図された行動は、外部環境からのフィードバックを受け、最適化を目指し、そこから得られた成果が「あるべき姿」として将来的にも実践的であり続けなければ、実用性は失われるであろう。外部環境は急速に変化している。伝統のプロセスへの再投資では、外部環境から最適なフィードバックを得られるように、内部は外部環境の変化を吸収できる革新性が求められるだろう。

事業の継続性は、外部環境が持っている、現在の進化を共有している「共時態 (Synchrony)」的な多様性 (Variety) の中に在る要因と、業界といわれるような経路依存性を個別に持つ「通時態 (Diachrony)」的な多様性 (Diversity) の中に在る要因が、外部と内部の間で、常に適切なフィードバックがなされているかどうかにかかっていると考えられる。外部環境が

進化し続けている限り、人為的に内部環境と外部環境の変化を一致させることはできないし、進化と退化を交差させフィードバックが掛からないように均衡させた社会を創り出すこともできない。内部環境が、進化し続けている外部環境から適切なフィードバックを得るためには、外部環境の「共時態」が持つ進化の速度に合わせ、自事業の内部を変化させ、自らの革新性を持たなければ、業界という「通時態」の中の競争にも勝ち残れず、事業の継続性は失われるだろう。

形式的あるいは外形的な老舗というブランドや、職人技らしき機能を満たしているというだけでは、もはや継続的な価値を生み出し続けることはできない時代に入っている。インターネットが普及したあとのIT (Information Technology:情報) 革命において外部環境で起きていることは、IoT (Internet of Things) から、AI (Artificial Intelligence:人工知能) へと、大きく進化し続けているという現実である。内部環境は、急速に進化し続ける外部環境から常に適切なフィードバックを得て、外部環境に在る多様性を吸収し続ける必要がある。

継続性を維持するには、進化し続けている外部環境を引っ張っている革新性が豊富にある多様性から、事業内部の課題解決に必要とされる要因である必要多様性 (Requisite Variety) を自事業に取り込み、自己改革を続けなければならないだろう。だからといって、職人技が持つ「こころ」の本質や実質を、AI (人工知能) が自らを概念化でき、概念を形式化できるわけではないので、AI (人工知能) の時代が到来したからといって、伝統的な職人技を放棄させるような環境は生まれまいだろう。AI (人工知能) は、学習機能を持つとはいえ、将来的にも外形的な特徴量しか反復できず、伝統の本質を概念化し継承することはできないからである。

四季それぞれに変化し、成長と枯れ朽ちる木々の小枝や葉を、観る者の心を癒す外形に整え剪定する庭師の職人技は、AIロボットでは実現できない。ただし、技術革新は起きるので、先端技術の活用は必要となるであろう。例えば、ドローン技術を使って、全体的にどのように剪定すれば遠中近の景観として最適か3D画像で確認し判断するとか、高所の危険を伴う剪定に活用する、といったことは必要となろう。先端技術を活用して得

られるノウハウは、庭師の職人技を進化させることにもなるはずである。

3. 実用性の伝承

3.1 個人依存の強い伝承

経路依存性を持つ伝統では、根源的な始まりを何に求めていたか、どこに見つけていたか、どのように見続けてきたかを確認することは難しく、伝統を物語化すると、属人的なモデルに変わってしまうことが多くなる。根源的な始まりから現在に至るまで、あるいは将来に向かって、その伝承されている事象には、外形的な伝承のみならず、内部的な心象の伝承に、実用性と有用性が認められている必要がある。経済性や希少性やイデオロギーでさえ、その時代時代の環境に見合った社会性と実用性を発揮できていなければ、その価値も評価されないだろうし、外形的な継承も、心象的な継承も、共同体の価値観として、守り続けられないであろう。

日本の伝統文化に詳しいD,キーンは、著書『果てしなく美しい日本』の中で、日本人が日本の伝統を継承していく手法の例として、“落語には昔の江戸の生活を扱っているものが多く、事実、新参者は落語を通して江戸の伝統を学んだ。”²と、伝統の外形と本質は、師匠からの伝承によって学び取れることをあげている。D,キーンは、また、小説家である司馬遼太郎との対談の中で、司馬遼太郎の“日本的なひじょうに暗いナショナリズムができて上がるのは昭和初期から、二十年までのほんのわずかな期間ですね。それを伝統だなんて、日本歴史のなかのどこからひっぱりだしたのか、奇妙ですね。”という問いかけに対して、“古い伝統を作るには、十年ぐらいかかる。すべての人に、こういう伝統はヤマトの国が生まれてからの伝統だと教え込むには、十年ぐらいかかる。”“逆に言えば、十年ぐらいかけると伝統を創り出すことが出来る、ということになるのかもしれない。”³と、

² D,キーン (1973)、(2002,9)、足立康訳、『果てしなく美しい日本』、講談社学術文庫、218

³ D,キーン・司馬遼太郎 (1972)、(2006,7)、『日本文明のかたち』、文春文庫、22,23

「やまと魂」が伝統だと思い込んだ共同幻想の伝統について、答えている。

実用性を継続する伝統を継承する難しさは、座ったままの一人芝居の落語の伝統の伝承形態に代表されるように、学ぶ側が伝授する側を「真似る」ことから始まり、物語の環境背景にある伝統まで「学び」とり、自分のものとしてのち、初めて独立した噺家として自分の落語を語れるようになる、という長期間の「学び」と「教え」の連続性を要する。

「空海の風景」という空海の真言密教について詳しい著作もある司馬遼太郎は、俳人である赤尾兜子との対談で、“師匠である自分を拝め、つまり自分が宇宙の普遍性なんです。普遍性になってしまう、だから師匠になる。”“学問も芸術も、みんな空海以降、それにまねて師承のものになったと言えます。”“先生と違ったことをすると破門されたりするでしょう。日本の明治以降の学問でも、いまだに似たようなことがあります。これは先生が立てた説だが、どうも間違いだとわかって、異を立てない。避けて、分野を別にして弟子はやる。”“そのようにして日本の学芸の伝統ができたんですね。⁴”と述べている。師匠が体現してきた普遍性を、弟子も体現し継承していくという、日本独特な継承体系ともいえる、外形のみならず心象という本質も伝承できる「師承」を完成させた創始者は、空海であったと指摘している。日本では、体系を継承させるのには、師匠の呼吸、口まね、心象を引き継ぐことまでしなければならないという伝承形態を、数多く見出すことができる。

司馬遼太郎は、『この国のかたち』(六)の中で、文章日本語が共通化した時期について、桑原武夫から指摘されたとして、“昭和二十七、八年とと思っていたが、氏はもう数十年下げて、「昭和三十年代、雑誌社が週刊誌を発行してからだと思います」と、明晰に、それも論証とともにいわれた”“品質向上のために相互に長所を模倣しあうことによってみじかい時間内に共通化がごく自然に遂げられた。共通化というのは、精度の高い型を生むことである⁵”と、報告している。

⁴ 赤尾兜子・司馬遼太郎(1978)、(2006,4)、『日本語の本質』、文春文庫、118-120

⁵ 司馬遼太郎(1996,9)、『この国のかたち』(六)、文春春秋、110,111

日本語には、会話態と文章態の「ことば」の使い方に違いがある。また、欧米語と違い、日本の会話態は、YES、NOからは始まらない。否定と肯定が最初から始まる文脈を持たないので、相手の反応を見ながら最後に、否定と肯定と疑問に置き換えられる。文章態には漢字が含まれるため、目で意味を把握できる特徴を持つ。文章態の標準化が進んだ背景に新聞ではなく週刊誌の存在があった、ということは、いち早く情報を報告しなければならない新聞文章態では、断片的でも意味が通じる短文化がなされるため、文章態の標準にはなりにくかったのかもしれない。会話態のような、丁寧語や目上や年下の人への使い分け、家族や友人、男女への使い分けを、方言も交えて文章化してしまうと、小説ではない限り、読む側は理解に苦しみ、奇妙な感じを受ける。

文章態には、いつの時代でも、伝達の正確さを図る標準化を必要としているはずである。伝統の本質の継承が、「ことば」のコミュニケーションによってなされるとすれば、どんな時代でも「ことば」の標準化は、重要な役割を持っていた、とっていいだろう。2005年以降、SNS (Social Networking Service) がコミュニケーションの道具として急速に拡大してから、ごく短い文の情報は、知識化できない、コンテンツのない文章態として、確立してしまっているような気配さえ感じる。意味解釈の標準化がなされていない、使い捨ての情報短文を、本質の伝達手段として使い、過去の定義で理解することは、フェイクである可能性もあり、危険さえある。絵文字が文章表現に入り込み始めていることを考え合わせると、現在、文章表現の標準化には、大きな変化が起きているのかもしれない。

「ことば」は、地域性を持つ方言も共有できる「共時態」と、時代とともに変化する使い勝手と意味が変遷する「通時態」の両方を持っている。日本列島における「ことば」の「共時態」で起きた標準化は、江戸時代の参勤交代が大きな役割を持っていたと思われる。藩主の家族や江戸家老は江戸弁が標準語であるため、地元の方言と「共時態」を保つことができたはずである。参勤交代が始まるまでは、戸籍を持たない非人と呼ばれる人々が、中央の「ことば」を伝統芸能の伝達と一緒に地方へ持ち込むか、「聖」が仏教用語とともに中央の「ことば」を持ち込むかしか、なかった。昔も

今も、その時代の会話態の「ことば」を文章化することは、漢字、ひらがな、カタカナを使い分けでも、難しい。万葉集の詩歌が、漢字の当て字であったことが、その難しさを物語っている。

戦前から新聞社が発刊していた週刊誌を、出版社である新潮社が昭和三十一年（1956）に発刊したことで週刊誌ブームが起き、文章日本語の共通化という伝統が新たに始まったという指摘は、興味深い。文章日本語の表現が標準化されたことは、マニュアルや経営理念を共有することに、大いに役立ったと思われる。1970年代の日本独自の生産性向上運動であった工程標準化を基盤にした、「カイゼン」運動や小集団活動には、文章表現の標準化は、欠かせない道具になっていたと考えられる。小集団が「品質」という「ことば」の意味や解釈を共有できなければ、川喜田二郎が開発したブレインストーミングの手法であるKJ法も、その威力を発揮できなかっただろうし、品質改善の七つ道具として普及した品質管理の手法も、日本の製造業には根付かなかっただろう。

「カイゼン」は、「後工程はお客様」という概念を生み出し、「品質は工程内で造り込む」という実践に発展し、検査工程を激減させた結果、仕掛在庫をなくす革新的プロセスを創出した。仕掛在庫をなくす仕組みは、日本固有のJIT（ジャスト・イン・タイム）の概念をも生み出した。小さな小売店舗に3,000種類の物品を置くコンビニエンス・ストアのシステムに活用され、賞味期限という鮮度の概念を共有することまで実現した。必要なものを、必要な時に、必要なだけ、というJITの概念は、日本のスタンダードになった。現在のオニギリが開発された背景には、このJITの仕組みがあった。日本の週刊誌は、日本語の文章「ことば」の伝統に革新的な実用性を生み出した、といっても過言ではなさそうである。

3.2 師承の体系

日本独自の「師承」という伝承手法が、多くの伝統文化を継承させ継続させてきたことは事実であろう。貴重な体系であり、大切に守り続けることも必要であるが、環境変化が急速である現在のネットワークが主体性を持ち始めた社会では、今のままでの「師承」体系では継承は存続できなく

なる可能性も高い。AI（人工知能）によるデープ・ラーニングは、ビッグデータを活用することで得られる相関関係の統計量によって、「ゲグルのネコの画像」のように、因果関係があるらしく見える外形的な部分の一部は、導き出せるようになった⁶。AI（人工知能）に置き換えられる分野では、人間しか持ち得ない心象の本質の伝承を除いて、実存の外形的な部分の「師承」体系は、AIロボットでも継承可能となるであろう。

伝統の中でも外形の「実存」しか伝承できない資産は劣化を起すため、外部環境からの適切なフィードバックを受けることが難しく、価値交換の有用性を失ってしまう可能性が高い。日本特有の伝統にある外形的な「形」は、心象のプロセスを重視したうえで継承できている。「本質」という概念が根底にある。茶道、華道、柔道、等々「道」といわれる伝統は、「外形」の中に「本質」を内包している。「師承」制では、伝統の本質に、師匠の恣意的な感覚が入り込む可能性が高く、伝統にある普遍的な本質を継承するプロセスは、非常に複雑なものとなっている。

外形的実在よりも、科学的であり哲学的な思考を要求される研究や学問分野では、外形だけしか受容できない受承者と、本質や原理を充分理解していない教育者における師承という継承の場面で、師匠の能力欠如による恣意的な感覚が入り込むと、大きな間違いが起きる。本質の伝承がなされない研究や学問は、いずれ淘汰されるとはいつても、IT技術が可能にしたコピー・アンド・ペーストによって、間違いが継承され再生されてしまい、間違いは拡散してしまう可能性もある。SNSの環境下ではフェイクニュースのように、間違いが正当化される懸念もあり、問題は深刻である。

教育現場では、自己改革をすることは難しく、革新性を許容しない師承体系をそのまま継続するとすれば、継承の存続は難しくなるだろう。時代の進化に見合った次世代を育てるというコーチングまでできる能力を持たない教育者は、実用性を発揮できなくなるだろう。師承制度が権力構造を創り出しているような、本質を伴わない外形的ヒエラルキーによる支配シ

⁶ 畑中邦道（2016,12）、『AIの進化と事業リスク』、国際経営フォーラムNo27、神奈川大学国際経営研究所、8

システムの師承体系は、早晚、継続性を絶たれるだろう。日本のスポーツ界で2018年に起きた不祥事では、日本独自の師承体系が組織を大きくしていく過程で、組織の私物化を起し、組織としてのパワー・ハラスメントさえ起こしてしまった。組織の私物化は、経済的な収益まで上げるヒエラルキーとして外形的構造を継承し維持してしまっている。独裁的に権力を発動できる連盟や協会の運営は、根本的な問題を気付かずに見過ごしてしまっている。環境変化への適応能力を、既に失っているのかもしれない。

事業経営であれば、同族経営でさえ、株主の評価を受け、経営手腕を発揮する可能性を持つ者が事業経営の組織継承者となるが、学問の世界では、多かれ少なかれ「師承」の罫は、研究機関や大学内の教育や研究のプロセスで発生している。革新性を生み出すために、研究をより深く掘り下げるプロセスでは、「師承」制は弊害ばかりではなく、欠かせない要因ともなる場合もあるので、見極めが難しい。日本の大学組織では、専門家としての地位が得られると、個々の組織が持つヒエラルキーの一員として組み込まれ、特権的組織構造の中で終身的地位を継続できる構造になってしまっている。既得権にしがみつ়く傾向が強い日本においては、実現が難しいかもしれないが、アメリカでは普通に行われている企業と大学の研究室との人材の相互移動が可能となる仕組みも、これからの大学の有用性を考えれば、自己革新として取り組む必要があるだろう。

3.3 師承組織の課題

日本の大学における「師承」制は、私学の経営をつかさどる理事会組織さえ、「先輩後輩」「師弟」の関係による「師承」制が、強く働いている場合が多い。特権的「師承」制が優先する教育組織体系では、企業組織の行動が実践するように、フィードバックが掛かりやすい実践に身を置く機会はほとんど得られないため、経験によってしか拡大できない知識や体系を矮小化させてしまい、気付かないまま間違った知識や体系を学生に伝承してしまうことがある。弊害をなくすためと思われるが、より良い教育体系を目指そうと、学生にアンケートを取ることも行われる場合がある。教えられる学生が教える先生の質とレベルを評価する、というものである。

市場原理の観点からすれば、教育現場のお客様は授業料を支払っている学生ではあるので、学生からの評価が必要だとする思考はやむを得ないかもしれないが、これから高いレベルの知識を得ようとする学生に、「分かる、分からない」「気に入る、気に入らない」という評価を下させるのは、どこか変である。アンケートは、なんとなく公平性や普遍性があるように思えてしまう外部コンサルタントによって実施されるが、コンサルタント側が持つ知識や知恵の多様性が、外部には見えない個別の教育現場が持つ内部の問題解決に必要な必要多様性 (Requisite Variety) を、より豊富に持っているとは考えられない。「多様性は多様性を吸収する」という原理が働くフィードバックは、アンケートの結果からは掛けられないことを、知っておくべきであろう。

学生による教育者へのアンケート評価は、教育体系に人為的に「底辺への競争」を造り込んでしまうことを起す可能性が高いことも考えておく必要があるであろう。知的レベルの高低に関わらず、「底辺への競争」に向かった方が、教育者の評価点は高くなるだろうし、学生は勉強しなくても単位が取れるという、双方にとって、安心であり、楽である選択になり得るからだ。アンケート調査により課題を見つけ出そうとする手法は、P, コトラーが主張するカテゴリーを決めて調査する伝統的なマーケティング手法と同じである。現在、P, コトラーは、デジタル・マーケティングと先端的なイメージを印象付けて説明しているが、デジタルデータの集積や分析は、アンケートの手法を抜きにしても、事前に設定したカテゴリーに依存しており、思い込みの誘導の罠にはまっている可能性は避けられない。

カテゴリーやセグメントを事前に決めた統計データに意味を持ったのは、どの母集団も相対的に似通っていた時代の名残である。現在では、問題解決に必要なフィードバックを可能とする因子である必要多様性を見つけ出すには、GPS (Global Positioning System) を活用できる分野では、エスノグラフィー (行動科学) による相関関係をビックデータ化して観察する方が、信頼性が高くなっている⁷。統計を取れば、問題解決の因果関係が見つかるのではないか、と思うのは錯覚である。統計は母集団が時間的に変化していないか、時間軸が伝統の継承よりも長い期間であれば、

頻度確率としての精度によっては、因果的な意味を持つ場合もあるが、アンケートで問題解決の要因が見つかるわけではない。

日本的な「師承」制が持つ本質的な問題解決は、実践者自身が考えて改良や革新を導き出し、失敗は起きるかもしれないが、教育体系をよりよくすることを目指し、実践を積んでノウハウを蓄積して解決するしか方法は無さそう。常に革新性を実現し、競争原理が働いている「師承」制であれば、内部と内部の関係で起きるアカデミック・ハラスメントのような、高圧的な「師承」の強制などは、起き得ないだろう。学んだ知識を社会へ還元することも可能とする仕組み造りは、学問の社会への実用性を実現していることにもなる。社会環境からの学問へのフィードバックも容易となるだろう。日本では、現在の大学院や大学卒業者を企業が採用しても、OJT (On The Job Training) を含め、一から教育し直す必要があるのが現実である。

4. 集団的伝承「盆踊り」

4.1 「盆踊り」の外形と心象

日本の伝統文化が持つコンテンツには、外形的な実存よりも本質的な心象が大切に守られている場合が多い。外形で判断し、本質に無関心であると、研究や学問分野でも、奇妙な論旨が生まれることがある。心理学者であった河合隼雄は『影の現象学』の中で、人間の二重性を「影」と表現し、ヨーロッパの中世で盛んになった、下級僧侶が大僧正に成り代わって奇妙な説教をし、民衆が道化として大騒ぎをする「愚者の祭り」と「盆踊り」を同一視し、“集団の外部に影を投げかけたりせずに、集団内で影の反逆を防ぐ方策として、人間は影の祭典というものを持っている。”“わが国においても、このような影の浄化の祭典は多く存在し、盆踊りなどもそのような意味をもったであろうし、現在も行われている。”⁸と述べ、「盆踊り」

⁷ 畑中邦道 (2016,12)、『AIの進化と事業リスク』、国際経営フォーラムNo27、神奈川大学国際経営研究所、29

⁸ 河合隼雄 (1987)、(2018,4)、『影の現象学』、講談社学芸文庫、57,58,192

について、「影の浄化」であった「愚者の祭り」と同様であると説明している。

「愚者の祭り」は、過去のできごととして消えたが、「盆踊り」は、日本の各地で現在も継承されている。各地域の町や村や地区単位で集団的に継承されているということは、「盆踊り」という伝統は、外形と本質が持つ実用性が維持され現在でも継承されている、と考えるべきであろう。外形的のみではなく、心象の本質に継承性が強い、と考えられる。「夜」と「踊り」に主体がある集団的「盆踊り」を、一部の共通点を拡大解釈して、「影の浄化」、「影の反逆」、「影の現象」として「愚者の祭り」と同一に扱うのは、心理学的な論理飛躍を容認するとしても、無理があるように思える。

「盆踊り」は、戦後の復興に合わせ各地で復活して、お盆休みに故郷へ帰る機会を作る実用性ともなって、現在でも継承され続けている。人の集う広場で行われる「盆踊り」は、神道的な田楽や神楽の「神を喜ばすための踊り」や「ハレ」「ケガレ」の意識を根底に持っている「祭り」と、仏教的な心象の本質にある「盂蘭盆会（うらぼんえ）」を伝承していると考えられる。神道的には、柳田国男が『日本の祭り』の中で指摘しているように、祭りの中心行事は日中の「日のはれ」に行われ、“諸人は清まった装束のまま、夜どうし奉仕するのが「日本の祭」であった。”“少なくとも祭礼は昼間のもの、「祭」はもと夜を主とするものであったと言っても誤りではないようだ。”⁹という、「夜どうし」が、「祭り」の原点であるのは、間違いないのではないか、と思われる。

どこの地域の「盆踊り」でも、音曲や音頭に合わせて外形的に集団で同じ動作をする、両手を上げて舞う仕草の伝承は、やはり釈迦の説法物語に出てくる「盂蘭盆会」の「盆（ボン）」に本質があり、亡き母が地獄で逆さ吊りされた夢を見て釈迦に救いを請うた光景を表しているサンスクリット語のウランバナ（逆さ吊り）が外形化した仕草、と理解するほうが、妥当だろう。バカ騒ぎによる集団内の人間の二重性を抑制する反逆防止への作用は、「盆踊り」には見出しにくい。

⁹ 柳田国男（1942）、（1969.8）、『日本の祭り』、角川ソフィア文庫、46,47

外形的には、神道では、60年ほど前まで、夜祭りの最中は全ての灯りを消すという、真っ暗闇の祭りが実在していた。武蔵府中の大國魂神社や筑波山麓にある筑波神社の祭りの「暗闇祭り」は、男女関係に実用性を持っていた風習の名残であったことは事実である。現在の「暗闇祭り」や、「夜祭」「盆踊り」には、家族で子供も参加できるイベントとして、地域の革新性を取り込んでいるので、この風習は継承されてはいない。

網野善彦は、『日本社会の歴史』(上)の中で、市場の成り立ちについて、河原・中州・浜や巨木のたつ場所を「市庭」にしていたと指摘し、“そこは神の力の及ぶ場であり、世俗の人と人、人と物の結びつきが切れるとされており、人びとはそこに物を投げ入れることによって、これを商品として交換しうる物とした。”“またそこでは神を喜ばせる芸能が行われるとともに、世俗の夫婦・親子の関係も切れるとされており、「歌垣」という歌をともなった男女の自由な性交渉もおこなわれたといわれている。”“各地の市庭では活発な交易が行なわれており、遍歴する交易民や遊行する宗教者や女性芸能民などもすでに姿をあらわしていた¹⁰”という説を述べている。

「盆踊り」の発祥が、バカ騒ぎである「愚者の祭り」と本質的に異なるのは、神道的な「神を喜ばず踊り」に、平安時代の空也上人の踊念仏や、鎌倉時代の一遍上人の念仏踊りが習合して、「神仏を喜ばず踊り」に本質が変遷し、「市庭での輪踊り」へと外形化したもの、と理解した方が、歴史的事実に近いだろう。盆踊りは、神社や寺院の境内では行われぬ。広場に集まって夜通し踊ったあと、「暗闇祭り」と同様に、婚姻関係に関わりなく雑魚寝する風習があったことは、民俗学や民衆の歴史物語りとして語り継がれている。外形的に、「盆踊り」の女踊りには、編み笠を被り、顔を隠して踊る形が多い。顔を隠すことは、集団以外の外部者も参加でき、集団内での婚姻関係も判別できなくなり、輪踊りで約束を取り付けて雑魚寝する風習の名残とも考えられそうである。ただ、編み笠を被るという風習は、田植え踊りの田楽から転化した編み笠かも知れず、外形の伝統だけ

¹⁰ 網野善彦 (1997,4), 『日本社会の歴史』(上)、岩波新書、162,122

で判断することは避けたほうが良いかもしれない。

4.2 「盆踊り」の継承と革新

「盆踊り」の伝統が、観光による有用性や実用性にまで高まっている「お盆の祭り行事」は、日本各地でみられる。江戸時代の元禄期に始まったといわれている、富山の越中八尾の三日三晩踊り明かす「おわら風の盆」は、その典型的な例の一つであろう。男踊りにも編み笠を被るものもあるが、夜の微光の中で、前深に編み笠を被る女性が背中を反らせながら、三味線と胡弓の音曲に合わせ、ゆっくり優雅に踊る姿は、優美で幻想的である。田植え作業を模しているという男踊りと女踊りの組み合わせは、単に台風による山背風が来ないことを祈る踊りとは思えない、空間的な男女関係を思わせる風情のある「盆踊り」となっている。

三日三晩の幻想的風景は、高橋治の恋愛小説「風の盆恋歌」(1985)に出てくる「死んでもいい。もう一度私を風の盆に連れて行ってください」の舞台と重なる空間を共有できている。現在の街並みは、駐車場も多くなってしまったが、崖の上の坂道にある卍状の狭い街並みは保存されていて、坂道の両側を流れ下る水の音が、心地よく響いている。街並みは、河原の高台にあり、河原から見上げる景観は、夜には石垣がライトアップされ、幻想的でもある。「おわら風の盆」の独特な盆踊りの仕草は、お盆シーズン以外でも見ることができる。町の職員が隔週の土曜日に踊りを披露するという、革新的な取り組みが25年以上続いており、海外からのリピータも多く訪れている。

八尾町に隣接する山側の雪深い旧山田村で、インターネットによる村内全戸へのIT化実現の革新的挑戦が1995年に始まった。町からの隔離性の高い寒村で、国家プロジェクトに近い形で実施された。隣近所といっても数100mも離れている住居もあり、高齢化が進む中で、社会福祉の先端ネットワークの実験場として、世界的な話題を提供した。当時は、八尾町も試験的に一部の機能を導入し、リンクしていた。寒村という集団の内部と外側にある多様性の豊富な外部環境の間で革新を起こしそうに見えたIT化は、モバイル端末の普及もあり、10年後の2005年には、その姿を消した。

現在は、その実験経過と実践の結果を展示しているのみであるが、人口が急減した現在も、高齢者はパソコンを自由にこなしている。継続する内部には革新を必要とするが、外部環境からのフィードバックが掛かる多様性からの要因を、内部で適切にコントロールできないと、その創出した価値を伝統として継承することが難しいことを、旧山田村は実証体験した。

旧山田村のIT化は、「おわら風の盆」の伝統を維持してきた八尾町の外形的にも本質的にも閉鎖的であった空間の継承性を破る、新しい伝統の始まりになる可能性があることも期待されていた。旧山田村の実証実験は、日本の寒村が、インターネットのリンクによって救われるかもしれない、という共同幻想に陥っていた。IT化の波に乗り遅れていたかに見えた「おわら風の盆」は、結果的に、希少性と言う意味では、日本を代表する観光資源になった。外部者も踊りに参加はできるが、地域の集団が共有している外形の伝統と、心象的な本質を継承している伝統の中に身を置くことによって、「盆踊り」の空間と時間に共感が起き、「共時態」を共有できるという、参加型ではない特異な「盆踊り」の事例を提供してくれていると思われる。

同じ盆踊りでも、「阿波踊り」の「踊る阿呆に、見る阿呆、同じ阿保なら踊らにゃ、そん、そん」の掛け声は、外形的には共同体が共有する意識の集団と集団の掛け合いと思われるが、外部者を共同体へ引き込む意味を持っていたとも思われる。どこの「盆踊り」でも、土地への帰属度が高く移動性のない集団的な惣村単位の百姓が、夏場の農閑期に、惣村を上げて夜通し踊る「祭り」の形態を継承している。移動性の高い職業を持つ百姓や非人に対して、移動性のない百姓が、無意識的にDNAの純化による継続性の断絶を恐れて、「盆踊り」のような「市庭」を利用した「祭り」の場で、外部集団のDNAの引き込みをしていたのかもしれない。

「阿波踊り」は、1586年に徳島城が竣工したお祝いに城下で勝手に踊ってよい、とのことで始まったといわれている。現在の「阿波踊り」は、外部からの引き込みではなく、外部への拡散を実現している。音頭に合わせて、両手を上げて勝手に踊る活気は独特なものがあり、徳島から外部に向いて拡散させたことで、本拠地の「盆踊り」の継承にも実用性を増しつ

づけている。

東京の杉並区高円寺の阿波踊りは、すでに60年以上開催され続け、いまや伝統の領域に入っている。JR高円寺駅の西口の脇道にある100店舗余りあるアーケード街の商店が、戦後の復興とともに、「高円寺ばか踊り」を開催していたが、現在の「阿波踊り」の「踊り」を競う個別集団である「連」を徳島から招聘したことで、現在の「高円寺阿波踊り」の組織化がなされた。今では、高円寺駅北口前広場をメイン会場として「高円寺阿波踊り」を続けている。「阿波踊り」は、各地に拡散することで本拠地の革新性を実現している、特異な例でもある。

盆踊りの「輪踊り」について、柳田国男は、『被差別民とはなにか』の中の「踊の今と昔」の章で、「輪踊り」が腰に飾りを付けて踊る「腰輪踊り」の略語から派生したものと思っていたが実際には、間違っていたとして、“この点は普通いずれの村の盆踊りにてもあることにて、踊りつつ前へ進まんとするには多人数ならば円形を作るのほかなきなり。¹¹”と、単純な理由であったことを述べている。外形だけの近似性や「ことば」の疑似性から、文化の伝統や科学的根拠について、異なる本質と同一視し、混同して師承してしまうのは、科学的根拠を覆してしまう間違いを起こす可能性もあり、文化的には伝統を守るという観点からも、実用性の本質を守るということから、教育者や研究者は自らを戒める必要があるようだ。

「ことば」や文章は、伝統の本質を伝承する道具でもあり、その時代その時代でコミュニケーション手段としての「共時態」を持っているだけなので、時代が変われば表現や使い方、発音までもが変わってくる。伝承を再現し現在の先端技術によって実用性を発揮させるには、その時代の使い方まで知る必要が出てくる。この場合の「ことば」の類似的変遷は「通時態」として確認しておく必要があるが、漢字熟語が外形的に似ているとあって、そこに関数的連続性や属性があると思いを違えることはあってはならないだろう。柳田国男は、伝統の中に在る経路依存性を持つ「ことば」と、外形的に見えることから使われる「ことば」が似ていても、本質は違う場

¹¹ 柳田国男（1911）、（2017.2）、『被差別民とはなにか』、河出書房新社、18

合があることに気がついて、わざわざ報告している。

日本の文化継承では、10年～20年単位の環境変化に対し、常に適応能力を磨き上げ、共同主観性を価値観として共有できる環境整備を怠らないという特徴を持っている。「祭り」でいえば7年ごとに行われる諏訪地区の「御柱祭」がある。伊勢神宮に代表される20年ごとの「式年遷宮」の儀式に見られるように、形式の継承と心象の継承は、20年以内が伝統を継承できる限界であることを経験的に示しているような気がする。

5. 共同主観性の伝承文化

5.1 外形と本質

日本では、歌舞伎や能といった伝統芸能や、地域性のある伝統工芸、また、宗教観を伴う地域性を色濃く引き継ぐ御神楽や、祭り、盆踊り、除夜の鐘、初詣といった、日本独自の風習を含めた地域の環境で継承されつづけ、数100年から1,000年の長きにわたって現在に至るまで、その実用性を含めて認められるものを、数多く取り上げることができる。単なる文化遺産や遺跡という歴史の痕跡ではなく、行動が伴って時代の進化に適応して継承されている事例が多い。

千利休により1550年代には完成していたと思われる茶の湯は、その道具に価値を見出す心象の在り方を始め、作法という動作を単純化し形式化させ、概念化による革新を成功させている。禅の真髄とも思えるような一瞬一瞬と、空間の有限と無限の継続性に意味を持たせ、一期一会による時空間を共有する狭い茶室が、政治をも動かした。茶の湯の伝統では、千利休による「詫び茶」を追求した革新は、特筆に値するだろう。「わび」の価値観は、客をもてなす手段として継続性を生み出すことに成功したといえそうだ。江戸時代には、「わび」と、俳諧や能楽の「さび」は、単に「ことば」による「わびしさ」「さびしさ」という生活空間や美意識を物語化するにとどまらず、概念化を可能とする哲学的な意味を持たせるまでに深化した。外形や形式のみならず、動作や作法の本質を「ことば」で表現することで概念化できる革新的な手段を、日本文化は手に入れたのではなか

ろうか。オノマトペア（擬音語）の多さも、その好例であろう。

鎌倉時代に確立した武士道の禅的意識からは、仏教的な「色即是空・空即是色」が「有即無・無即有」であることを感覚的に感じることができ、同時に、一瞬を共有している「共時態」には無限の多様性（Variety）を認識できている。「種」として、どこかで分岐して経路依存性により継続してきた「通時態」には、有限である様な多様性（Diversity）を感じ取ることができている。日本語では、VarietyもDiversityも、「多様性」という「ことば」の概念の中で同時に共有している。日本民族が持つ「ことば」は、「やまとことば」を漢字表記して以来、ひらがなを生み出し、カタカナを生み出し、それらを使い分けることで、概念化にも多様性を与えることができるという、実用性の高い手段を生み出してきた。

茶道の伝統に限らず日本の地域性も含めた数多くの伝統は、第二次世界大戦での敗戦により、断絶の危機に陥ったことがある。多くの都市が焼け野原となり経済的にもどん底に追い詰められ、外的なイデオロギーによる思想転換が激しさを増したが、文化の継承は持続性を保ち続け、新しい時代環境に適応力を発揮し、なんとか継続性を維持し続けた。物質的な価値の交換様式だけで成り立っている伝統であれば、経済的ダメージに遭遇すれば、物質的な価値は簡単に崩壊し、博物館に保存されるだけのものになってしまい、伝承は途切れてしまっているはずである。

日本の伝統文化の継承では、個々人の心象が共同主観性を生み出し、物質的ではない心象的な価値を共有できるという特異な文化を持っている。一瞬の美を競う生け花の伝統などでは、流派がいくつもあり、それぞれが価値の伝統を継承しているというのも、世界的にみて珍しい。東の果ての島国であり、文化の伝承の最後の溜まり場となっていた民族が、自己の存続を維持しようとすれば、どうしても物質の継承だけではなく、本質を継承できる概念化が必要となった、とも考えられる。日本文化における伝統の概念化では、外形である品物や動作の本質を、「わび」「さび」という言語的表現に置き換えることを可能にしている。心象的な価値を「ことば」で共有できるという、世界的にも日本民族にしか起きていない、特異な世界観を維持、継承、伝播、伝承している。

伝統文化の本質を概念化できたことは、進化する時代に相反することなく「共時態」として時代に合った「ことば」によって本質の概念を変革ができ、概念を変革させることで、伝統が持つ外形への革新性をも生み出し続けることを可能にし、革新性は時代時代に適応し、変遷させ、「通時態」としての継続性を保ち、伝統の継承を可能にしたと思われる。本質を継承するという哲学的概念化のプロセスは、J-P,サルトルが主張する「実存は本質に先行する」¹² という、人間個人の主体と主観が本質に先行するという実存主義の思考からは、継承し続けられなかったのではなかろうか。「種」と「個体」をネットワーク状に結合させ、フラクタルな属性構造をもつ「トーテム操作媒体 (Totem Operator)」を提唱し、構造主義を主張していた民俗学者のC, L,ストロースは、日本の伝統文化の本質に直接触れて、日本文化の虜になってしまい、和食文化にも魅了され、亡くなるまで米を炊飯器で毎日焚いて食べていた、といわれている。

C, L,ストロースは、友人であったJ-P,サルトルの実存主義に対して、“真の問題は、理解しようと努めることによって意味を獲得するか失うかではなくて、大切にとっておく意味の方が、賢明にも捨てた意味より価値の高いものであるかどうかである。”“サルトルの体系では、歴史がまさに神話の役割を果たしている。¹³”として、過去の「共時態」しか見ておらず、「共時態」による多様性 (Variety) や「通時態」による多様性 (Diversity) への視点が欠如していることについて、痛烈に批判していた。伝統は、実用性と継承性という、「共時態」と「通時態」を示す外形的な構造を持っているが、継続性を維持し実用性を伝承している日本文化の伝統には、必ず心象的な本質の継承が維持されている。外形性は「真似る」ことで継承できるが、本質は「ことば」でしか伝承も伝播もすることができない。

5.2 和食の文化

日本の食の文化における実用性を例に見ていくと、興味深いことに気付

¹² J-P,サルトル (1944)、(1955,7) 伊吹武彦・他訳、『実存主義とは何か』、人文書院、140

¹³ C, L,ストロース (1962)、(1976,3) 大橋保夫訳、『野生の思考』、みすず書房、306

く。日本料理は中華料理やフランス料理の様に、あらかじめ食材を混ぜ合わせて提供する仕組みになっておらず、刺身料理に代表されるように、口の中で混ぜ合わせた味覚の感覚を伝承している。味覚の個人差さえ克服するという在り方は、共同体の中での価値観の共有や、違い、といった実用性の尺度を遥かに超えてしまっていて、世界にもまれなる多様性（VarietyとDiversity）の豊富な伝統文化を継承しているといえるだろう。一般的には、外形の実存と内部の表象は同じであるというような、自覚によって実在を客観的に認識する、デカルト的な「我思う、故に我あり」という世界観から意味を感じとる思考の方が多い。日本の食の文化に見出される、自覚という個人差をも克服して、本質と実存を伝承しているような文化は、その空間を共有し、感覚的にも共感が起き、共同主観性を共有できなければ、価値観を理解することは難しいだろう。

日本料理の提供の仕方には、伝統的な特徴を見ることができる。一品一品提供していく伝統と、いちどきに全てを提供するという、異なった伝統がある。一品一品を提供する伝統では、食する側が主役であるはずが、食を提供する料理人の方が主役であるような場面がよく見られる。料理人は食の職人として主役の座を占め、食の提供を仕切っている。「今日のお勧め」「おまかせ」といったやり取りが存在する。本来、食する側が客であるので、オーダーをする立場にある主役は食する側であるが、目の前で手際を見せながら、価値の創出を一品一品創り出す日本料理の伝統では、食する側が料理提供側の職人技をリスペクトしている。外部の実存と内部の心象を、両者で共有できた時に、はじめて「おもてなし」が完了する。

日本食の料理店では、カウンター越しに、一期一会の客かもしれない相手と共感を共にするために、価値の創出を目の前で、心を込めて一品一品を造り、提供する。世界標準は、対価を支払う客が常に主役であり、好みに従って提供してくれれば、客はチップをはずむだけである。食材の味をミックスするノウハウを料理人側が持っているため、料理する現場を他人には見せたがらない。サービスは別人が行う。日本の「おもてなし」は、支払われる対価に対して行使されるわけではなく、職人技をリスペクトした「御馳走さま」という感謝があって、初めて完了する。海外からの旅行

者は、なかなか、その外形と本質の機微が理解できない。特に、中国からの旅行者は、「おもてなし」は支払った対価に対して、顧客を満足させてくれる慣習とと思っている場合が多く、トラブルになることがある。

日本料理の料理人は、食する側のタイミングと好みに合わせ共同主観性を共有する役割を担う。一品一品を目の前で料理して、料理を乗せる皿や器も、味や四季によって変え、総体を感じとりながら味わってもらうという、「通時態」的な時間と空間を共有することができている。いちどきに全てを提供するという伝統では、味わう順番は主役である食する側に委ねられていて、提供者と味わう者は、「共時態」的な時間と空間を共有する必要があり、地域の特徴や方言を共有できているように、理解やコミュニケーションの環境や空間に、相互の共同主観性が働いていないと、提供者と味わう者の共感を共有することは、難しくなるだろう¹⁴。

「共時態」的な料理の提供の場面では、口の中で混ぜ合わせて味わう主役は、自分だけにある。混ぜ合わせで得られる満足度は、よほどの食の通でなければ、味わう順番の選択が難しくなるだろう。箸の文化を併せ持つ日本料理では、料理を箸でつまんで口に運ぶ。選択に困ったときは、見苦しい所作とされるが、目移りする料理に、あれこれと少しずつ箸をつけることもできる。口の中で混ぜ合わせて初めて経験できる味は、自分だけの食の物語を作ることができる。自分だけにしか得られない味わいの醍醐味を知覚できることは、「共時態」のよいところでもありそうだ。

「通時態」と「共時態」という二つの食の伝統に、地域性のある「地酒」の選択が加わると、味わいの醍醐味に、より多様性が豊富に生まれる。「通時態」的な空間では、料理の提供者が食の味わいにあった地酒の味の違いをお勧めできる。「共時態」的な空間では、味わう側の知識や経験に選択が委ねられるので、知識不足や食に通じていなければ失敗する場合がある。伝統のある環境の仕組みの中で新しい組み合わせの目的を達成しようとして要因を増すときは、「通時態」の方が「共時態」の方より、「教師あり」

¹⁴ 畑中邦道 (2017,10)、『事業活動と経営理念』、国際経営フォーラム No.28、神奈川大学 国際経営研究所、21

によるフィードバックが得やすく、空間を共有している感覚に共感を覚えることで共同主観性が成立しやすいため、「共時態」で Try and Error を試みながら学習するよりも、伝統の継承に適正化が働きやすい、と考えるのもよさそうである。「教師あり」を「コーチング」と読み替えると、「師承」制の持つ優位性を考える上でのヒントが、得られるかもしれない。

味の醍醐味を増やす「地酒」の醸造方法は、どこの蔵元でも、ほぼ同じ工程を持っている。アルコール発酵を促す酵母をあらかじめ培養しておき、酵母菌を純粹培養して「醗（もと）」を造り、蒸米、麴、水を加え「醪（もろみ）」を造っていく。酵母菌の微妙な違い、使用する米、水質の硬度や味の違いにより、地酒特有の味が、低温発酵によって違ってくる。日本酒の革新性は、パスツールが発見（1862）した低温殺菌法にさかのぼること800年余り前の平安時代後期には、「火入れ」という革新的な発酵停止技術をすでに開発していたとも考えられている。全国的に普及したのは、1500年代には入ってからのものであるが、地酒の伝統の保存と流通を可能にした、画期的な技術である。火入れをしない生酒は、毎年違ったでき栄えを楽しめる伝統を持ち、地方の食材に実用性を付加した。

実用性の高い酒税という税制から継続性を見てみると、江戸時代の中期（1759年）、倭約令を施行した松平定信の寛政改革では、米の収穫から醸造に使う量を統制して地酒の事業継続性を保ちながら、江戸に入る関東以北の地酒と、灘や伊丹という関西地区から樽廻船で輸送されてくる質の高い「下り酒」に対し、かける税率に差をつけるという荒業さえ実行できている¹⁵。近年、日本国内では、1975年をピークに苦戦しているが、地酒の作り手等は、直接ニューヨークなどで試飲会を開くなど独自に努力を重ね、洋食に合う酒を開発して、輸出に活路を見出している¹⁶。食の文化の伝統は、自己革新によって、時代に合った複合的な実用性を維持していることで、継続性が保たれているようである。

¹⁵ 吉田元（2016,12）、『江戸の酒』、岩波現代文庫、42-52

¹⁶ 畑中邦道（2015,12）、『創出と継続』、国際経営フォーラム No.26、神奈川大学 国際経営研究所、29

6. 実用性を欠く伝統

6.1 集団的幻想

歴史上、ある期間では継続性を保っていたのに、現在の時点で、全く実用性を欠いてしまっている伝承とは、どんな特徴がみられるのだろうか。実用性に価値がなくなったとは、単に歴史におけるある時期に起きた、集団的幻想が個人の自由意志を圧殺して、どうしようもできない必然にうながされ、実用性があるがごとく信じ込まされ統制されたために、その歴史的時期だけについて、伝統的な継続性があると人々が思い込んでいただけかもしれない。

吉本隆明は、集団的幻想について『共同幻想論』の中で、“共同幻想も人間がこの世界でとりうる態度がつくりだした観念の形態である。〈種族の父〉も〈種族の母〉も〈トーテム〉も、たんなる〈習俗〉や〈神話〉も、〈宗教〉や〈法〉や〈国家〉と同じように共同幻想のある表れ方であるといえることができる。¹⁷⁾”と、本質論が入らない物質論や観念論は、共同幻想にすぎない、と主張した。“かれらは破産した神話のうえに建物をたてようとしているのだが、わたしは地面に土台をつくり建物をたてようとしているのである。”と、批判した。

吉本隆明の著書は1982年の著書であるので、C, L, ストロースが『野生の思考』(1962)で主張した構造主義の「種」と「個体」が「トーテム」となっている思考を批判しているが、C, L, ストロースは1977年以降、何度も日本を訪れ日本文化に直接触れて実体験したことで、2007年に亡くなるまで、日本文化の虜になっていて、外形的な構造の中にある本質に意味を見出していたが、このことには触れられていない。C, L, ストロースが『野生の思考』で示したトーテム構造が、「共時態」と「通時態」の外形的構造を示しており、現在のインターネットのネットワークのリンク構造と重なって見えることは、興味深い。インターネットのネットワーク構造による情報リンクは、共同幻想を生み出していると観ておくことも、今

¹⁷⁾ 吉本隆明 (1982,1)、『共同幻想論』、角川学芸出版、37,39,221

後、必要になってくるかもしれない。

事業経営で継続性が認められているからといって実用性が保証されている訳ではないという事例は、老舗の事業経営ではよく起きている。老舗というブランドが共同幻想を起こしている場合、幻想であるにもかかわらず、伝統と思い込んでいることがある。因果関係を持たない神話となった成功物語のうえに、外形的なブランドだけを継承する建物を建てても、共同幻想を拡大するだけで、幻想は、ある日突然、崩壊する。老舗のブランドが持つ伝統の本質を継承できていない場合に起きている、と考えるとよさそうだ。家督相続による老舗が、世代が変わると倒産するのは、よく見かける光景である。

スカンディナヴィアにとどまっていたバイキングが、793年を境にして広汎に急速な進出を果たし最盛期を迎え、僅か300年足らずで姿を消した歴史的事実は、幻想であったのであろうか。300年ほど継続した実用性は、なぜ、消滅したのか。J,ダイヤモンドは、断絶について、『文明の崩壊』の中で、「「押す力」（母国の人口増加による圧力、好機の減少）なのか、「引く力」（外国を植民地化できる好機、未居住者の区域の存在）なのか、あるいは双方の力が働いたのか” “押す力とは、母国での人工増加と王権の強化であり、引く力とは、入植できる無人の新しい土地や、居住済みでも裕福で無防備ゆえ略奪可能な土地が外国にあったことだ。¹⁸” と、化学反応の速度が酵素などの作用によって自然に上がる「自己触媒作用」を例にとって、バイキングの盛衰について述べている。

バイキングの例では、利得が発見を促し、発見が利得をもたらす好循環が触媒作用として初めは起きていたが、ヴィンランドという過酷な入植地を10年足らずで放棄せざるを得なくなるという、経済的には痛い経験をしている。1066年のスタンフォード・ブリッジでの戦いに敗れたことが誘因となり、進出コストが拡大や戦勝品の価値に見合わなくなったのであろう、継続性は絶たれた。継続が絶たれた要因には、アメリカ大陸の近辺

¹⁸ J,ダイヤモンド（2005、2011）、(2012.12) 楡井浩一訳、『文明崩壊』（上）、草思社文庫、371

まで航海していながらアメリカ大陸を発見できなかったか、入植に失敗した経験から発見していても入植するのを敬遠したか、原野だけを見て戦勝品の略奪の動機が生まれなかったか、といったことも考えられる。いずれにしても継続する意欲が失われた事実は、経済的にも実用性がなくなった、という結果を歴史に残したのではないだろうか。

われわれ日本人も、第二次世界大戦勃発時には、大東亜共栄圏を信じ、昭和に入ってから20年弱で「やまと魂」が伝統だと信じ込み、太平洋戦争を起し、敗戦し、民族の滅亡寸前にまで追い込まれた経験を持つ。敗戦日は、1945年8月15日である。内部的には戦いを終えた終戦であるが、外部的には無条件降伏をした敗戦であり、昭和6年（1931）に日本陸軍が起こした満州事変が、発端となっている。アメリカは、自国が戦勝国になった場合、「やまと魂」らしき伝統を持つ民族を、戦後どう統治したら良いのか、戦時中には十分に研究を重ねていた。この研究が、戦後の復興を実現していく日本に、伝統文化を継承できる種を温存してくれた、といっても過言ではないほどのインパクトを持った。

日本の内部は、戦禍で疲弊し、空襲と原爆で焼け野原になり、壊滅的に伝統の経済的価値の原資を失ってしまった。「量」と「質」の原資を失った内部は、多様性があるだけでは外形さえも維持できず、経済力も含め、革新するだけでは、外部の多様性からのフィードバックは、適切には掛かりようがない。外部に内部の多様性を理解できる者が多くいなければ、伝統文化の多様性は、勝者の伝統文化によって徹底的に弾圧され破壊されるのが、人類の歴史で経験してきたことである。幸いにして日本の戦後は、伝統文化の「質」だけは失わずに済んだ。

『菊と刀』の著者、R.ベネディクトは、日本文化の伝統を分析した外部の理解者としては、突出していたと思われる。文化人類学者である女史は日本を訪れたことはないが、日本民族への客観的観察の積み上げが、日本民族の本質について概念化することを可能にしていたと思われる。間違っていると指摘される部分もあるが、戦時中の研究の詳細について、戦いが終結した翌年の1946年11月には『菊と刀』を出版し、なぜ日本民族が文化のみならず多方面にわたって伝統を継承できてきたか、その背景の「本

質」について発表した。驚異的な早さである。翻訳本が世界中に出回った。この著書で、東洋の東端である小さな列島民族が持つ「本質」の多くを、世界中が知ることになる。戦が終わった直後に、世界中の知識人が、この著書に触れ、敗戦国でありながら日本を理解してくれたおかげで、多くの伝統が継承できたであろうことは、想像に余りある。日本人自身でも、客観的な世界観から見ると、日本の伝統文化が持つ外形や本質はそう見えるのか、という発見が多く見出せる。

R,ベネディクトは、文化人類学者として、“一方は、恥を強力な支えとしている文化。他方は、罪を強力な支えとしている文化である。¹⁹”と、常に対比させて、日本の文化は「恥」の文化である、という本質に迫っている。日本の明治時代の幕開けは、革命であったと客観的には見られているが、“明治時代の指導者は、おのれの使命をイデオロギー革命ではなく、事業とみなした。彼らが想定していた目標は、日本を存在感のある国にすることであった。彼らは伝統をやみくもに破壊しようとしたわけではない。封建階級を貶めるとか、没落させるとかいうことはしなかった。”と述べ、欧米的な一神教による革命の外形や本質とは、大きく違っていることに気付いていた。戦後の民主主義による復興は、明治維新の革新性と同じような思考、手段を使っていたように思える。集団的幻想と伝統の本質は、外形として現われる事象が違っているだけで、「質」を継承する共同主観性は、同じ根から派生しているのかもしれない。

6.2 幻想とフィードバック

「押す力」と「引く力」が存在する環境には、内部環境と外部環境の間でフィードバックが効いており、目的的结果の達成を期待して最適化するには、必要多様性 (Requisite Variety) の因子の存在を必要とする。内部環境の持つ問題を解決するには、外部環境の持つ必要多様性の因子の数が、内部環境が問題解決に必要とする必要多様性の因子の数よりも豊富でなければ、問題は解決しないし、コントロールもできない。外部環境と内部環

¹⁹ R,ベネディクト (1946)、(2008,10) 角田安正訳、『菊と刀』、光文社、130,353

境の間では、「水が入る相撲」の様に押す力が相互に均衡しているように見える場面や、「綱引きゲーム」の様に引く力が相互に均衡しているように見える場面が、一瞬、出現する。

一瞬の均衡を錯覚して、あたかも静的均衡が存在するように思い込んで、共生する均衡が最適である、という幻想に陥ってしまうことがある。均衡は一瞬であり、押す力と引く力が複合的に一方向に傾けば、均衡点がテッピングポイントになり、東日本大震災のプレートの滑り込みで起きたカストロフと同じように、一瞬ののち、大崩壊が始まる。時間軸で変わっていく環境という系を、最適化に向けフィードバックを適切に掛けることは、現在の先端制御技術を活用しても大変難しい。

生態系でも、社会現象でも、均衡し静止状態で安定しているということは起き得ない。ましてや、人為的に均衡させることは不可能である。均衡していると思える現象は、微視的には動的であり人為的に静的均衡を創り出すことはできない。経済学で均衡について議論できるのは、仮定した所与を一定とした場合、均衡点を提示できるのであって、人為的に所与を一定にすることは不可能である。経済学の方程式が幻想を語ってしまうことは、よく起きている。計画経済の継続が実用性を発揮せず、伝統を創り出すこともできず、幻想であったことは、歴史が実証済みである。

変化に比例して保持、統制、制御させても、時定数による遅れや感知誤差や偏差が現実の世界には必ず存在していて、その累積はより大きくフローに影響を与え、何もコントロールしなければ、影響は幾何級数的に大きくなって行ってしまう。微分制御や積分制御に加え、予測の制御性を過去のビックデータを活用して特徴量をAI（人工知能）によってインタラクティブに学習させ制御に生かせることができたとしても、センシングできない僅かなひずみやノイズが外部環境に存在すれば、系を安定化させ最適化させることは難しい。

6.3 人為的な実用性の創出

継続という実用性を人為的に創り出し、伝統化しようとする場合は、どう見ておけばよいのだろうか。中国共産党が造り出している南シナ海を巡

る実用性は、歴史的に中国領土であると一方的に主張して実効支配を始めて、その実用性を伝統化させようとしている。南シナ海の領有については、海洋資源が見つかるまでは、中国国内での共同幻想にさえなっていなかった。今や、中国国民は、南シナ海は中国国家の領有地域であると信じており、歴然と南シナ海に九段線を引き、西沙諸島や南沙諸島を埋め立て、軍港と軍事的な飛行場を建設し継続的な海洋地域を支配し始め、実用性を確保することに、国民自身が疑問を持ってはいない。

集団的な共同幻想が個人の自由意志を圧殺してしまうことは、歴史的には数多くみられる。T.ピンクは、自由意志について、著書『自由意志』の中で、望むものの正しさの期待と、個々の決心は動機や欲求とは異なるものであるとして、“分別ある人が望むものの望ましきは、彼らが望むからではなく、それがただ起こるべきことであるということに完全にもとづいているからかもしれない。”“決心は、その対象つまり目標として決められた自発的行為に向けられる合理性の行使によって成就、達成されるべきものである。”²⁰としている。

自由意志は、強制力を持つ制圧下でない環境でのみ通用し得る意思決定とその実行であるが、慣習が思考や行動を伝統として制約していれば、自由意志の望まれる決心は、経路依存性の強い慣習に従ってなされてしまうであろう。慣習を含む文化に実用性があると市民が信じていれば、慣習を国家の法制度として国民に強制しても、国民は法制度に疑問を持たずに従うはずである。その場合の国民が従っている法制度は、中国式の「上有政策・下有対策」（法は厳しくても抜け道はある）であるかもしれず、あるいは、文化の本質を継承している自由意志となっているかもしれない。

個人の自由意志が圧殺されることは、宗教的集団やイデオロギーに独裁権を持つ国ではよく起きている。独裁国家や共産主義的な国家資本主義を率いる個人の決心が、圧殺により集団の合理性を生み出し、個人崇拜が生まれ、個人の決心が他者に望まれるものであろうがなかろうが関係なく、集団をあげて、成就、達成に邁進する。邁進に従属しなければ、個人は捕

²⁰ T,ピンク (2004)、戸田剛文・他訳 (2017,12)、『自由意志』、岩波書店、133,134

らえられ抹殺されるだけとなる。継続という実用性を人為的に創り出し、伝統化しようとするイデオロギーは、共同幻想として片づけられるレベルにはなさそうである。

ヨーロッパ経済圏は、欧州共同市場から欧州共同体になって最終的には欧州連合（EU）となり、ユーロという共通貨幣経済圏を人為的に造り出した。要の国の一つであったイギリスは、国民投票で離脱することを決めた。EUが創り出した人為的な実用性は、どうなっていくのだろうか。想像上のコミュニティについて、Y, N,ハラリは、『サピエンス全史』（下）の中で、“消費主義と国民主義は、相当な努力を払って、膨大な数の見知らぬ人々が自分と同じコミュニティに帰属し、みなが同じ過去、同じ利益、同じ未来を共有していると、私たちに想像させようとしている。それは嘘ではなく、想像だ。貨幣や、有限責任会社、人権と同じように、国民と消費者部族も共同主観的现实と言える。どちらも集合的想像の中にしか存在しないが、その力は絶大だ。²¹”と、述べている。

人為的にも経済的にも自由でありたい欧州連合と、覇権により力づくで中国型世界標準をグローバル基準にさせたい中国とは、同じ過去、同じ利益、同じ未来を共有していることを、我々に想像させる。中身と本質は違っていても、どちらも、人為的な実用性の伝統を創り出そうとしていることには変わりはない。人類は、実用性のある伝統や慣習に革新性を持ち込み、次世代の実用性を生み出さなければ、継続性を失うということについて、経験を通じて痛いほど知っている。人類には、人為的にでも、何とか革新性によって新しい伝統を創り出さねば生き延びられない、という恐怖感を刷り込まれているDNAが存在しているのではないだろうか。価値を生み出し、実用性のある伝統であっても、進化する時代の環境に適応能力を持ち、最小限でも革新性を生み出し続けなければ、外形は急速に劣化するだろうし、本質も陳腐化し、実用性は忘れ去られるであろう。

²¹ Y, N,ハラリ (2011)、(2016.9)、柴田裕之訳、『サピエンス全史』（下）、河出書房、198

7. 継承とレジリエンス

7.1 環境変化への適応能力

実用性を欠いてしまう伝承には、科学の進化に伴って経済的な優位性の選択が変わってしまうとか、紛争や戦争によって負けた集団の文化が壊滅されてしまうといったことにより、環境によって維持されていた伝承が、突然、途切れて影も形もなくなってしまう事例も歴史には刻まれている。情報革命が起きたあとの現在では、先端技術を活用した環境の変貌が急速で、ワンチップに入っているトランジスタ素子の数が毎年2倍になるというムーアの法則の通りに、幾何級数的な速度で環境が変化している。

先端技術の創り出している環境は、すでに現在の人間の持つ適応能力を超えてしまっているかもしれない。『フラット化する世界』の著者であるT, フリードマンは、『遅刻してくれてありがとう』（上）の中で“科学とイノベーションの加速度は、平均的な人間と社会構造が適応して吸収する能力を、はるかにしのいでいる。²²”と指摘している。あくまでも平均的であるという前提であるので、科学とイノベーションの加速度を吸収し、適応能力を持つレジリエンス（Resilience）は、まだ、取り戻せる可能性があると考えているようである。

適応可能であるには、適応したいと願う側の環境の多様性が、科学やイノベーションが持つ多様性よりも、より豊富でなければ、W, R, アシュビーが提示した、「多様性は多様性を吸収する」という制御可能なフィードバックは掛けることができない。人間の能力が持つ多様性が、科学やイノベーションが持つ多様性を吸収しきれず、適切なフィードバックを得ることができなくなる状態は起き得る²³。平均的な人間が、科学やイノベーションに適応できず、科学やイノベーションを受け入れられずコントロールが不可

²² T, フリードマン（2016）、（2018.4）伏見威蕃訳、『遅刻してくれてありがとう』（上）、日本経済新聞出版社、59

²³ 畑中邦道（2017.10）、『事業活動と経営理念』、国際経営フォーラムNo.28、神奈川大学 国際経営研究所、33,34

能になってしまえば、新しく生まれる伝統は実用性を失ってしまうだろう。

伝統が実用性を継続するには、適応能力として外部の変化を吸収し自己破壊を起こさない物理的な弾性値に富む対抗力を持つ必要がある。生態的な免疫力と復元能力や、人間のコミュニケーション能力によるネットワークを使って、吸収力と弾力性を増加させ、本質を持続できるレジリエンス (Resilience) を高めておく必要もありそうだ。伝統を維持継続している内部環境が持つレジリエンスを高めるには、外部からのフィードバックが可能となる必要多様性をみつけて、適正にフィードバックを掛けることによって、実用性を支える価値観による適応能力を上げ、多様性の吸収力を高めておく手立てが不可欠になろう。

T, フリードマンは、『遅刻してくれてありがとう』(下)の中で、“加速の時代に、多元的共存——ジェンダー、思想、人種、民族の多元的共存——をはぐくむ社会は、より創造的になり、他のこともすべて平等になる傾向がある。多元的共存を受け入れる多元的な国が創造力を伸ばす可能性があるのは、世界のどこからでも最高の才能を引き出し、多様な観点をより混ぜ合わせることが出来るからだ。²⁴”と、多元的共存によってレジリエンスを高め、継続への実用性を高めておく必要性を主張している。多元的共存が生み出す多様性が多様性を吸収でき、内部環境と外部環境の相互に最適なフィードバックが適正に掛かるようになれば、適応能力を取得でき、レジリエンスを高めることが可能とはなりそうだ。それには、多様性 (Variety と Diversity) を吸収できる自己吸収能力を、自己革新によって生み出すしか方法はなさそうである。伝承手段としての「師承」という、個人への依存性が高くなる矮小化した普遍性しか伝達できない方法は、見直す必要があるだろう。

7.2 レジリエンスの回復

歴史的には、その時期やある時代だけには実用性があったかもしれない

²⁴ T, フリードマン (2016)、(2018,4) 伏見威審訳、『遅刻してくれてありがとう』(下)、日本経済新聞出版社、132

が、伝統としては継続性を持たず、ある出来事の始めと終わりを説明する歴史上の記述として扱われてしまっているものが、数多く見つかる。科学的な知見が増したことにより価値が再発見されて、新たな実用性として経済的価値を生み出すこともある。歴史上の過去の一時期における「共時態」が共有していた限られた多様性 (Variety) の環境でしか価値を生み出していなかった道具や生活用品や工芸品が、現在の「共時態」が共有している豊富な多様性 (Variety) の環境で、同じ便益を提供してくれるはずはないが、先端技術を活用することで、自給自足的な環境で生まれた生活用品や工芸品が、新しい使い勝手や便益性を広げる、ということはあるだろう。観光資源や「おみやげ」として再現されたものが、現実の実用性を生み出しているかには疑問はある。再現や再生によっては、単なるインテリアとしての再評価であったにしても、心の癒しという新しい知見により、伝統文化に再生の価値を生み出すということは、あり得る。外部の参加者による能登の白米千枚田の棚田の再生物語は、その一例であろう。

結果だけしか見ることが出来ない現在の我々は、伝統の価値について、今、生きている環境の衣食住や、組織活動や科学を含み、個人が属する集団の環境からしか観察できないという欠陥を持つ。過去の事実は観察できても実体験できないため、過去の事実と現在の環境との因果関係を説明することができない。伝統について語る時、可能性のある原因と可視化できている現在の結果を意図的に繋げて説明することは、よく起きている。統計的なデータがあるわけではないので科学的とは言えないが、現在でも実用性を発揮しているのであれば、物語の信憑性は、ある程度、確保されていると考えても差し支えないだろう。

経営学の事例研究では、事業経営の成功事例として、よく因果関係があるがごとく、取り上げられることがある。現在の成功には原因があり、ある行動の意思決定がそこにあったからだ、という物語がよく語られる。あるいは、ある軸を設定し二元論的な枠組みを示しマトリックス化して、ある事業経営の物語は、枠組みやマトリックスを説明する典型的な例だとして、正当性が立証されたがごとく普遍性を説明するケースも発生している。ストーリー化は、自慢話として面白い物語にはなるが、事前確率も事後確

率も統計的に立証できているわけではないので、その要因だけで現在の結果が導き出された、とは確定できない。ただ、過去の時間帯の中の要因であったひとつに、主要因らしき始まりがあった、ということまでは言えそうである。

H,ポアンカレは1902年に、このことについて、“一つの結果はAという原因からも、Bという原因からも生じ得る。Aという原因の確率を求める。これは原因の事後確率である。しかしこれを計算するには、つまるところ正当な規約があって、事の起こる前にAという原因が作用する事前確率がどうであるかを私に知らせるのでなければ、不可能である。私のいう事前確率の意味は、この事象の結果をまだ観察していない人に対するこの事象の確率の事である。²⁵”と説明している。

事前確率が分かるかどうかは、人類にとって重要な科学的意味を持っている。現在のAI（人工知能）技術でも問題になっている焦点のひとつである。人間の脳における知覚と判断行動との関係が、ポストディクション（後付け）で成立している可能性が否定できないからである。AI（人工知能）が暴走を起こす事前確率をAI（人工知能）自身が自己計算して、自身の誤りを自己確認したうえで、自己の選択として自己停止できるか、という禅問答のような難題が横たわっている。人間が暴走の事前確率を認知して人為的に暴走を停止できるか、ということも脳がポストディクション（後付け）であるとすれば、暴走を停止させることはできないことになる。どちらも停止は不可能になってしまう²⁶。

伝統の始まりを見出すには、生のその時代の環境や状態を可視化できているわけではないため、その現象が観察可能であったとしたら、という仮説からしか物語を始められない。現在のAI（人工知能）技術を使えば、多くの現存資料をビックデータとして活用して、現在の伝統が内包しているキーワードから、出来事や要因を特徴量として引きだし、相関性を取っ

²⁵ H,ポアンカレ（1902）、（1938,2）河野伊三郎訳、『科学と仮説』、岩波文庫、233-234

²⁶ 畑中邦道（2016,12）、『AIの進化と事業リスク』、国際経営フォーラムNo27、神奈川大学国際経営研究所、39

て、その価値の相対的あるいは総合的な分析は可能であろうが、その伝統が将来においても実用性があるかどうかは、AI（人工知能）自身でも、判断できない。

7.3 再生可能なレジリエンス

H,ホワイトは、著書『実用的な過去』において、ホロコーストを起こしてしまった歴史的事実を取り上げ、現在の実用性には、「わたくしは何をすべきか」も入れるべきだとして、“わたしが（あるいはわたしが所属している共同体が）抱えている問いかけにとってきわめて重要であると信じる過去である。歴史的な過去ではなくてこの過去こそが、なんらかの仕方、わたしとわたしの共同体の現在を、実存的な現在に結びつけるナラティブ（物語）を要求するのであって、その実存的現在では、「わたしは何をすべきか」という問いかけについての判断と決断が求められるのである。²⁷”と、主張している。過去の出来事の開始と中間点と終着の物語を現在に結び付けて、ナラティブとして伝統の継続性を共有することは、その事象が再現するわけではないので、「歴史に学ぶ」という実用性しか得られないが、「何をすべきか」という、将来への実用性を生み出す可能性のある継続は、伝統の継続性の要因として捉えてもよいだろう。

ある集団が伝統的と思っている文化や価値観は、先端技術や生活環境の違いを乗り越え、その価値観を共有できる共同主観性が成立しなければ、集団内での交換価値は生まれえない。それは、本来、文化や慣習が独自の継続性を保っている環境の内部のみで成立しているはずであるが、国家の存続を成立させているイデオロギーによる経路依存性を人為的に造り出し、強制という制度として持ち込んでしまっている集団の多様性（Diversity）においては、交換様式を通じて、外部性が働く環境をも巻き込んで拡大を続けてしまうことは、現実には起きている。

集団内のイデオロギーによる制度の強要が伝統らしく振る舞うのは、現在の中国の姿を見れば、よく理解できる。一人っ子政策という人為的に人

²⁷ H,ホワイト（2014）、（2017,10）、上村忠男訳、『実用的な過去』、岩波書店、123

口数を増減させる強制が伝統となり、若年層に経済的負担だけが発生するという高齢者社会を創り出してしまい、二人っ子政策に変えた。自国の人口数を人為的に権力で統制できるという強制力があれば、伝統を強制力で創り出すことは、容易なことであろう。若者が負担する高齢者への経済的負担が大きくなるという事態は、日本でも問題は深刻であるが、人口が日本の10倍ほどである中国では、深刻さもその量と同等であると考えられるため、社会制度の存続まで崩壊させてしまう懸念さえある。

集団内でも都市戸籍と農民戸籍の間で比較優位を人為的に振り分け創り出し、都市戸籍が農民戸籍を取奪する仕組みを完成させた。しかし、農民戸籍が都市戸籍の食糧を満たすという比較優位による国内自給はできておらず、大きく輸入に頼っている。都市戸籍に優位性を持つ共産党一党主義は、世界的な大富豪を生み出した。制度を伝統化することによって、マイナス効果が生み出す「負の外部性」は歴史上には無かったことにして抹殺し、廉価な農民戸籍の出稼ぎ労働力を使った国家資本主義による「物量」という輸出品によって、国内の生産性を維持することに取り組んでいる。「質」によるレジリエンスを、獲得する気は無いようである。

GDP世界第2位になったことで、グローバルにも成功モデルとして、経済的劣位にある国々に対し、国家資本主義による資金援助を名目に「一带一路」を掲げ、インフラ整備を中国企業の資財と労働力によって構築し、現地に中国村を創り、移民と同じような公共性と市民権を有するディアスポラ化を実現し、弱小国家の資金債務を増やし、植民地化のような取奪のモデル化を進めている²⁸。革新的な伝統を新たに造り出し、将来的な実用性を生み出そうとする中国の覇権主義と制度とマナーが、世界の知的水準と経済的生活水準を上げることに貢献するかどうかは、まだ、誰も予測がつかない。経済的な弱小諸国の天然資源を奪い文明文化を崩壊させてでも、経済的な関係性を強制的に維持させ、イデオロギーの新しい世界秩序によって人類の環境への最適化が生み出せる、という簡単な図式には疑問が

²⁸ 畑中邦道 (2015,1)、『価値を発信する地域は、世界にルールを強制するか?』、国際経営フォーラム No25、神奈川大学国際経営研究所、89

多々あり、答えは見えていない。

「わたしは何をすべきか」という視点では、過去の過ちから学び、賢くなり、摂るべき手段を選択すべきである。人間が持つ本質と歴史的な実存による伝統が、自己吸収力を維持できていた過去のレジリエンスは、新しい経済国家の力による覇権主義によって、一方的に崩壊させられるのではないか、という懸念がある。一旦、「底辺への競争」が起きれば、「わたしは何をすべきか」と行動する前に、人類は向上心をもつ意欲を簡単に放棄してしまうであろう。どの宗教でも、もはや、それを救うほどの力を持っているとも思えない。科学の進化は、既に、人間の吸収能力を超えている分野も多々出現させている。地球の自然界が維持しているレジリエンスは、人類が気付いていないだけで、崩壊寸前の時間帯を、いま、過ごしているのかもしれない。

本質を持たない外形だけのイデオロギーによる覇権主義でも、現在の国家資本主義的な外形の継続性を短期的には継続維持できるかもしれない。本質について概念化ができていない実存主義的な個人主義の金銭崇拜主義でも、「量」による外形のコピーを繰り返すことはできるため、自己膨張することだけは可能である。「共時態」を共有する多様性 (Variety) の一領域を独占する「量 (Quantity)」の拡大はできても、継続性を維持するのに不可欠な伝統が持つ本質である「質 (Quality)」の創出ができなければ、「信じられる」という信頼性は生み出されないで、いずれは空洞化を起こす。「通時態」としての多様性 (Diversity) を継続するに不可欠な外部性からの適切なフィードバックは、「量」にしか掛からず、「量」だけでは信頼性を相互に維持し共有することは難しい。

伝統を創り出すつもりが「負の外部性」が起きれば、「量」による連鎖反応は「質」のレジリエンスという吸収能力を持たないため、「量」による負の連鎖は新たな「量」による負の連鎖を生み出し、「量」を伝統だと思い込んでいる集団の仕組みは、ティッピングポイントを簡単に迎えてしまうだろう。「量」の経済学は、「質」という知識 (Intelligence) や情報 (Information) の経済性や継続性の関数を持っておらず、「量」による投資の関数と、「量」の消費の関数を利用した、需要と供給の資本主義の経

経済学からしか成り立っていない。「質」のレジリエンスを評価できる経済学を必要としているが、「わたしは何をすべきか」も加える必要がありそうだ。

7.4 ポスト資本主義社会

現在、継続性を維持している伝統は、過去からの経路依存性を持つ、資本主義の経済性から実用性を生み出している。現在の資本主義は、貧富の格差を拡大していて、富める者に優位性を増す収奪モデルに変容してしまっているという危機感を、誰も抱いている。収入格差を発生させない、分配の公平化という理想論を持つ共産主義の先端を走っている中国で起きていることは、世界でも有数の貧富の格差社会の増大である。国営企業と官僚組織に優位性を持つ共産党員と、自給自足と出稼ぎを強いられている地方の農民戸籍の収入とでは、平均的な比較データさえ得られないほどの格差を生じている。中国の国家資本主義は、グローバルレベルで、借款という経済支援の方策を使って、弱小国と自国との国家の経済性の格差を増長させている。

社会的、経済的格差が拡大し続けている現在の資本主義には、欠陥が多く発生し始めていることが指摘されている。実用性を維持するには、外部と内部の間に、よい効果がプラスに働く「正の外部性」が必要である。情報化社会を迎え、ネットワーク外部性が、伝統の継承やレジリエンスを維持する環境に、正と負の外部性として、良くも悪くも、大きな影響力を与え始めている。投資と消費、需要と供給で説明できていた資本主義が生み出してきた伝統を、知識や情報の革新性によって、外形的にも本質的にも継承し続けることを必要としている。我々が「ことば」で認識している、実用性がある伝統と思い込んでいる事象が、将来的にも、現在と同じような実用性を維持してくれるかどうかは、誰も分からない。

外形のみの継承では、心象や概念を「ことば」で引き継がないため、伝統の内部の本質が持つレジリエンスは脆弱で、外部からの多様性の吸収能力も低く、環境変化に概念を変化させ追従させることは難しい。1980年代から始まった情報化時代は、インターネットのネットワークを生み出し、

2000年代に入ってGPSの普及もあって、誰でもどこでも情報を繋ぐことができるようになって、2010年代では、あらゆる情報は共有でき、相互に交換でき、仮想空間でありながら、あたかも実際に隣り合わせて繋がっているような感覚を持てるようにまで環境は変化した。しかし、インターネット上にある情報（Information）は、あくまでも伝達を可能とする「ことば」の記号であって、個人や事業が独自に所有している、ノウハウを持つインテリジェンス化された知識（Intelligence）ではない。

情報を知識化し、知識の実用化を図るには、コード化された情報が、単にビックデータとして、そこにストックされているだけでは、知識にはならない。データの相関性や、統計的な処理をしたのちの特徴量が、何か意味を持たなければ、知識として活用できるわけではない。「画像」でも「ことば」の文脈でも、本質の意味を見出せるのは、今のところ人間の脳だけである。現在のAI（人工知能）は、データと記録と演算能力を、外部からは見るができないアルゴリズムとしてしか、持っていない。現在の「情報の経済」は、資本主義とどうやら折り合いをつけている様にも見えるが、情報を持っている者と、持たない者との格差は、広がり続けているようである。次世代を牽引すると思われるノウハウというインテリジェンスは、外形を持っていない。「知識（Intelligence）の経済」は、はたして現在の資本主義と折り合いを付けられるのであろうか。

P. F. ドラッカーは、1993年の著書『ポスト資本主義社会』の考察の中で、すでにこのことについて、ポスト資本主義の経済学を期待して、「知識の経済学」について、“今言えることは、何らかの理論が必要とされているということ、つまり、知識を富の創造過程の中心に据える経済理論が必要とされているということである。”と、提唱していた。今までの、経済を消費の関数としてみる理論や、経済を投資の関数としてみる理論は、知識経済では通用しないとして、“知識経済における「不完全競争」は、経済それ自体に内在する。他に先がけた知識の利用、すなわち「学習曲線」によって得られる優位性は永続する。逆転は不可能である。ということは、自由貿易も保護主義も、それだけでは、経済政策としては機能しないことである。”“知識経済にあっては、経済を規定するものは、消費や投資では

ない。消費が増加すれば、知識の生産が増加するという根拠はない、投資が増加すれば、知識の生産が増加するという根拠もない。”と、述べている。知識経済における学習のあるべき姿は、“教科内容そのものよりも、学習の能力や意欲のほうが、重要でさえあるかもしれない。ポスト資本主義では、生涯学習が欠かせない。²⁹”と、指摘している。

今では、P, F, ドラッカーが指摘していた知識と学習は、情報化社会を牽引している本質となっている。AI（人工知能）は、ビッグデータという情報のデータをベースに、デーブ・ラーニングという学習によって、情報を知識化できないかに挑んでいる。日本におけるAI（人工知能）の研究者達は、心の中の喜怒哀楽は何処から来ているのかをデータ化して、ロボットを人間化できないかを目指し、取り組んでいる。AI（人工知能）は、すでに人間のコミュニケーションのネットワークに入り込んできていて、ネットワーク外部性を持つ人間の知識の経済効果は、情報の発信源やリンク先が、AI（人工知能）であるかどうか、分からなくなってきている。「知識の経済学」の理論が生み出される前に、創造性を必要としない情報や、革新性を生み出さない学習しか必要としない分野は、AI（人工知能）に乗っ取られてしまっているかもしれない。倫理性を欠くシンギュラリティが、ある日突然、出現しかねない。

P,メイソンは、『ポストキャピタリズム』の著書の中で、“ドラッカーの洞察は、それまで生産要素とされてきた「土地」、「労働」、「資本」よりも、「情報」が重要になった、という主張に基づいている。ドラッカーは、著書『ポスト資本主義社会』で、資本主義にとって極めて重要な基準が取って代わられた、と述べた。”“彼は情報資本主義を、何かほかの社会へ移行する過程にあるものと想像した。”“どうすれば知識の生産性を向上できるか、だった。機械と労働の生産性向上を基盤とする時代を経て資本主義が生まれたのであれば、次の時代は知識の生産性向上が基盤になるに違いない。そのためには異なる知識分野を創造的な形でつなぎ合わせる必要があ

²⁹ P, F, ドラッカー（1993）、（1993,7）上田惇生・他訳、『ポスト資本主義社会』、ダイヤモンド社、303,304,333

る、とドラッカーは考えた。³⁰ と、その先見の明に驚きを表明しているにもかかわらず、「知識の経済」は、ベーシック・インカムによって解決できるといった主旨の主張をしている。

7.5 ベーシック・インカム

現時点で実用性が継続しているのは、どうやら経路依存性を外形的に伝承してきただけではなく、伝統の内部にある本質を「ことば」によって概念化してきたおかげで、時代の変化に適応能力を持ち、変化に対するレジリエンスを発揮でき、内部の本質である概念に革新を起こし続けられ、現時点でも実用性を維持できているのではないかと考えられる。AI（人工知能）が人間の脳の仕組みに置き換わる可能性や、AIロボットが人間の仕事をこなす可能性が見えてきている。AIロボットに倫理性はないが、倫理性への哲学的な対処法などが議論される社会環境の時代を迎えている。はたして今までの伝統は、継続性を保つことができるのだろうか。

情報革命による進化が加速しているという認識を持たざるを得ない現在、ポストキャピタリズムという資本主義の後に来るかもしれない環境を想定して、現時点では思い込みであるかもしれない伝統の実用性を継続するには、どんな手立てが考えられるのだろうか。新しい外部環境の想定は、集団幻想を想定するにすぎないかもしれないが、実像の継続性を期待するためには、内部革新を起こす必要がある。内部革新は期待する目的や目標を設定しなければ、内部をコントロールするに必要なフィードバック要因となる、外部環境の多様性 (Variety) のなかにある必要多様性 (Requisite Variety) を探し出すこともできない。

シリコンバレーの先端テクノロジーを生み出している起業家である M. フォードは、テクノロジーが人間の仕事を奪う脅威について『ロボットの脅威』の著書の中で、“テクノロジーはどれも、私がこれまで持ち出してきた主要な議論にどうしても必要なわけではない。むしろそうしたテクノ

³⁰ P.メイソン (2015)、(2017.10) 佐々とも訳、『ポストキャピタリズム』、東洋経済新報社、198

ロジューは、格差の拡大と失業の増加へ容赦なく向かっていく傾向をさらに——そして劇的に——強めうるものとみなされるかもしれない。”と述べ、対処策としてベーシック・インカムを提案している。アメリカ国内での実施を想定していて、ただ乗りが出てくることや、生産性に直接寄与しないことも承知の上で、“ベーシック・インカムは、購買力が消費者へと向かう流れを保ちつづけるため、強力な経済の安定剤として作用し、深刻な景気後退に伴うコストを避けられるだろう。こうした効果はもちろん数量化は難しいが、ベーシック・インカムは少なくともある程度、割に合うという強力な論証になるだろう。³¹”と、主張している。

現在のAIロボットでは、革新的テクノロジーの創出やアイデアを生み出す人間の脳が持つ概念化はできない。統計的な特徴量をビッグデータから引き出し、教師ありの学習をしても過去の反復しかできない。教師なしの学習は、アルゴリズムがあるだけなので、実現しているかどうかは永久に分からないが、概念化ができたという立証はされていないので、まだ、実現していないと考えるべきであろう。市場は、過去の特徴量からでき上がっているわけではなく、将来の期待値でできている。マス目の制限を持つゲームの勝ち負けとは、本質が違う。現在のAIロボットが、どこまで人間の仕事を置き換えてしまうか、タクシードライバーがいらなくなるといった話の延長線上だけでは、格差の拡大が起き、失業が増加するという話にはならない。全ての仕事がAI（人工知能）ロボットに置き換わるはず、という推定は疑わしい。

創造性のいらない、概念化の必要がない、期待する結果への意欲を必要としない分野での、投資とコストと生産性の優位性比較となることは考えられるが、ベーシック・インカムによる最低収入を保証する社会保障制度が、投資とコストと生産性の優位性を単純にカバーでき、割に合うという立証は、できないだろう。伝統の伝承プロセスでは、本質を概念化できないAIロボットでは、革新性を自ら生み出すことは不可能なので、外形の

³¹ M, フォード (2015)、(2015,10) 松本剛史訳、『ロボットの脅威』、日本経済新聞出版社、300,327

伝承は物真似レベルにとどまるはずである。再現性としては反復できるが、創造性が試される外部環境からのフィードバックによる実用性の継続が要求される伝統の継承は、無理であろう。

P,メイソンは、『ポストキャピタリズム』の著書の中で、ポスト資本主義プロジェクトへの達成プロセスでは、第一段階として、ベーシック・インカムの方策を実施するとしている。ベーシック・インカムはポスト資本主義への単なる移行への手段だ、とも述べている。限界効用や収獲逓減の理論が通用しない情報資本主義という世界に求められるのは、現在の市場の在り方を廃止することだとして、“市場絶対的命令によって廃止する理由は、「自由市場」という言葉でごまかされている権力の不均衡を廃止することなのだ。企業が独占的価格を設定することを禁止し、普遍的なベーシック・インカムが利用できるようなれば、市場は「限界費用ゼロ」の効用を伝達する役割をする。”“ベーシック・インカムは、ポスト資本主義の方策として、ゼロに縮小することが成功とみなされる人類史初の社会保障制度ということになる。³²”としている。生産性をどこに求めるかについては、何も言及していない。ポスト資本主義の市場においては、人間のもつ創造性、意欲、協働、運動量等の違いも、価値の交換様式も認めないというベーシック・インカムによる社会保障制度が、プロジェクト・ゼロの第一段階で必要だ、と主張している。

ネットワーク外部性が収獲逓増を生み出すからといって、情報化や知識化にコストがかからないわけではないし、知識化されたノウハウは生産性そのものを生み出す原資でもある。P,メイソンが述べている「限界費用ゼロ」の生産性は、外部性からフィードバックされるネットワークによる効果が、実物の移動が持つ経済効果よりも、効果が大きく出ることがある場合にのみ適用できる概念である。水や食糧や消費財の実物が、全てAIロボットで提供できると仮定しても、「限界費用ゼロ」の環境は生まれない。自然現象は、人為的に「限界費用ゼロ」にはできない。情報の拡散効果が

³² P,メイソン (2015)、(2017.10) 佐々とも訳、『ポストキャピタリズム』、東洋経済新報社、452,463

出る分野では、リンクが各段階を増すごとに、情報の濃度は幾何級数的に弱まっていく。同じ濃度でリンクを「限界費用ゼロ」でネットワークの隅々にまで繋げることは、物理的にもAI（人工知能）を動かすコンピュータの消費電力から考えても、実現できないと考えるべきだろう。

ベーシック・インカムの制度をグローバル社会の隅々まで、現在の経済活動を「絶対権力」によって一旦停止させて一斉導入できる、という政治的手段が、存在しているとは思えない。我々は、すでに社会主義による計画経済の結末を経験している。計画経済の絶対権力は、再生産性への人間的意欲をそぐことにつながる経済環境を人為的に創り出し、愚かな結果を招いた。資本主義の次の時代を、ベーシック・インカムに求める発想は、物理的な外形を均一化し、経済的に一定基準の領域を実現しようとするものでもある。社会環境に、多様性からフィードバックが掛からない均一性の領域を、人為的に増やすことにもなる。多様性は、その分だけ損なわれることにもなるだろう。機会均等の平等性は損なわれ、分配の平等性が優先する計画経済に戻らざるを得なくなるだろう。AI（人工知能）の本質を理解していない一部の経済学者が、職を奪われるという幻想にとらわれ、解決策はベーシック・インカムにしかない、と主張するのは、いかがなものだろうか。

世界規模で革命が起きても、多様性のある人類の社会にベーシックな収益の一樣性を人為的に造り出すことができるとは思えない。ベーシック・インカムがもたらす均一化は、伝統の本質が持っている、個々人が持つ心象の拠り所や、「ことば」による外形を概念化、抽象化する意欲も否定することになるだろう。人類が概念化を放棄すれば、経路依存性を持つ伝統は、その価値の全てを失うだろう。それが、人類にとって良いことかどうか、格差是正への方策は必要ではあるが、P, F, ドラッカーが述べていた、異なる分野の繋がりや、創造的概念を生み出した方が、人類にとっては得策ではないだろうか。

伝統に、将来的な実用性の継続を期待するには、「師承」制により伝統をかろうじて維持できている場合であっても、自己満足やブランドへの依存心に陥らないように努力して、今、この時代の環境変化から僅かでも

フィードバックを感じ取れる感受性を磨くしかないだろう。感受性を高めるには、感度を上げるための自己変革が必要になる。自己変革をするには、外部環境にある増加し続ける多様性（Variety）から「学び取る」しか方法はない。「学ぶ」ことが難しければ、別の分野の経路依存性（Diversity）の高い「師承」制で起きていることを「真似る」ことから始めてもよいだろう。外部環境が多様性（Variety）に満ち満ちていると感じ取ることができれば、個人であろうと事業体であろうと集团的組織体であろうと、内部環境が最低限必要としているレジリエンスを取り戻す目標が見えてくるであろう。

個人であろうと組織であろうと、感受性が豊かさを回復すれば、外部環境へのアンテナが働き始め、内部環境の多様性を増加させることが可能となりはじめる。内部環境の多様性が豊かになると、問題解決に必要な必要多様性の因子が見つかり、外部環境に在る必要多様性の因子から適切なフィードバックが掛かり始める。適切なフィードバックを得るためには、先端技術の活用やプロセスのIT化やAI化も必要になるだろう。内部環境が外部環境の変化速度に追従が可能になったら、自己のレジリエンスを高め適応能力を個々に発揮できる仕組みを構築して、持続可能なPDCA（Plan, Do, Check, Action）サイクルをスパイラル状に上昇させることができるはずである。

8. 小規模事業経営の継続

8.1 家督の継承

製造工程や品質に関わる定型的な作業工程を持つ家督の事業体では、ITを活用して観測データを増やし、データによるPDCA（Plan, Do, Check, Action）をスパイラル状に上昇させ、回し、向上させるカイゼンや技術開発につなげる試行錯誤が、短期的には伝統の継承に効果を得られる手段となっている。職人や人的サービスが付加価値を生む家督の継承は、もともと人間の資質が大きく効く分野であるため、カテゴリーによって統計的にデータ化しても、解決に必要な因子は事業ごとに個別に違っているた

め、あまり参考にならないだろう。

家督を継承する事業経営の場面では、「ひらめき」といったような気付きや、外部環境の変化をいち早く感じとり行動に移す、アジャイル的な思考と意思決定も必要となるであろう。外部環境の変化が自事業に及ぼす影響度を判断する感性を持つことが、一番重要となりそうだ。外部環境からの影響による内部環境への変化の必要性は、エスノグラフィー（行動科学）の手法を使い、内部と外部の相関性を観察する必要があるが、外部環境の総体的な変化は、ある程度の普遍性や蓋然性を持っているので、変化を個々の事業が多様性として吸収しているかどうかだけでも、定点観測を続けておく必要があるだろう。

単に、外形的な家督を継承しても、外部環境が変わってしまっていれば、過去の家督が継続できてきたと思われる内部が持つ実質の価値を継承していなければ、実用性は生まれないだろう。実質の価値をノウハウとして知識化し、時代に合うように活用していなければ、継続性は維持できなくなる。家督相続で失敗するのは、ほとんどが、外形的な実存を継承するだけで、内部を築き上げてきた先代の実質である心象を引き継いでいないため、外部環境にある顧客を失ってしまうことで起きている、と考えられる。

J,アタリが『アタリの文明講義論』の中で生態系の進化について述べていることは、実際の老舗や家督を伝承している事業体でも、同じような現象として捉えることができそうだ。J,アタリは、“たとえば、ある肉体的特徴がサバイバルと生殖に有利なら、その特徴は発展して拡散するだろう。しかし、偶然による突然変異は、ほとんどの場合、多様性を創り出し、新たな特徴を生み出すことに寄与する。不測の事態に直面した際、サバイバルする生物種が、当初の環境に最も適応していた生植物とは限らない。それは新たな環境において決定的な特徴を持つ生殖種だ。そうした特徴は、それまで無駄どころか有害だったとしても、新たな環境では有効に働くのだ。³³”と表現している。老舗や家督を継ぐ、あるいは伝統工芸や伝統芸能を継承でき成功している事業体は、決定的な特徴を持つ生殖体と同様、

³³ J,アタリ（2015）、（2016.9）林昌宏訳、『アタリの文明講義論』、ちくま学芸文庫、102

内部環境のカイゼンや革新性は日々の努力の中で構築されているであろうし、外部環境に対しは継続的な実用性を確保できているであろう。文化文明に対して独自に持つ希少性が優位に働いていることもあり得るだろうが、そうそう一般的に起きているとは思えない。

「特徴がサバイバルと生殖に有利なら、その特徴は発展して拡散する」という例では、日本列島特有の火山帯と地層の違いによる成分の異なる湧水が融合して湧き出る温泉を利用した施設は、有利な実用性を継続している例といえるだろう。異なった源泉が、温泉治療を可能とするという天然資源は、日本特有の資源でもある。I, L,バードは、『日本奥地紀行』の中で、温泉地での出会いと、日本には乞食が居ないこと、盲人の自立等について、印象的に記述している。I, L,バードは、明治11年(1878)5月に上海から横浜に着き、東京に滞在の後、3か月間におよんで、東北、北海道を旅している。47歳であった女史は、日光を経て、会津、新潟、赤湯、上ノ山を旅し、東北から北海道に渡って、アイヌ民族を訪ねている。

新潟から山形に入った時、山奥でも田畑が整備されていることに驚き、“彼らは苦しみ、烈しい労働をしているけれども、まったく独立独歩の人間である。私はこのふしぎな地方で、一人も乞食に出会ったことはない。”“盲目の乞食は日本中どこにも見られない。盲人は自立して裕福に暮らしている尊敬される階級であり、按摩や金貸しや音楽などの職業に従事している。”と、記述している。女性は嫁に入ると家督に隷属するが、盲人でさえ乞食にはならないし、大騒ぎの祭りでも危険を感じない、子供は勉強に熱心であるという、山奥の文化度を見て驚愕している。盲人が琵琶を弾き平家物語を語っていたという文化の伝承は良く知られている。日本の社会では、盲人は官位を授けられていた。官位を持たない座頭による按摩という職種は、世界的にみても日本にしか存在していなかった。

『徳川制度』(朝野新聞)の記述によれば、仁明天皇(833)の時代には檢校・匂当・他の段位を持つ官位が成立していたらしく、江戸時代では“檢校・匂当の営業は、鍼治・琴曲の類を専門とし、座頭以下の輩もまた鍼治・按摩を業とするもの、音曲を業とするものあり。”“高貴の門・豪富の家にも出入りして、所得も多かりし”“瞽盲(めしい)の貸金としあれば、

幕府の保護一方ならず。³⁴”とある。I, L,バードが観ていた光景は、まだ、江戸時代の制度による伝統を継承していた社会環境の一部であったのだろう。日本独自の社会福祉制度と師承制度が、うまく実用性を発揮できていた時代の好例と思われる。現在では、鍼灸医療は、国家試験が課せられ、東洋医学の先端医療技術になり始めている。

I, L,バードは新潟から山道を越え赤湯に泊まろうとするが、三味線がうるさく、上ノ山温泉を目指す。現在でも、赤湯、天童、蔵王、上山と、大小さまざまではあるが、最上川上流は温泉に恵まれていて、江戸時代には、街道の宿場のみならず、既に観光地としての存在感も有していた。当時の上ノ山温泉では、湯治客が600人ほど滞在していたようで、I, L,バードは、宿とホテルの女主人が未亡人であることを知って、“私は彼女の優美さと気転がさくのにはまったく感心する。どれほど長い間宿屋を経営しているのか、と未亡人にたずねたら、彼女は、誇らしげに「三百年間です」と答えた。職業を世襲する日本では、珍しいことではないことである。”と、家督の継続性について記述している³⁵。この宿は、現在は存在していない。1703年（元禄16年）創業であった日本有数の老舗旅館の一つ元湯五助旅館が、残念ながら315年を経て2017年に閉館してしまった。現在のホテル業では、赤湯で1664年に創業した堺屋旅館が上山温泉に1923年、二軒目を出した老舗の大規模ホテル、「T」ホテルが、350年以上にわたり宿泊施設としての伝統を継承している。

日本的な文化を持つ事業の継続性は、50年～100年ほど有用性を維持できていれば、老舗と称してよいのかもしれない。明治時代か大正初期に創業してあれば、老舗と自称していても、あまり違和感はない。地酒の酒蔵でも同じであるが、100年～300年の継続性は、珍しいことではないが、老舗のブランドだけでは持続性を保つことはできない。持続には、時

³⁴ 加藤貴・校注（2015,2）、朝野新聞（1893・明治26年）、『徳川制度』（中）、岩波文庫、80,81

³⁵ I, L,バード（1885）、（1880）（2000,2）高梨健吉訳、『日本奥地紀行』、平凡社ライブラリー、210,221,283

代の環境に見合う、それ相応の革新性が求められるが、食の分野で味を変えることは持続性を自ら断つことにもなるリスクを持つ。

長野県の諏訪湖近辺は、四国の四万十川と同じく、天竜川を上る「うなぎ」が採れたため「鰻屋」も多いが、中でも老舗を自称している「F」は、昔から美味しく有名であった。30年以上親しんできたが、2018年に先代が変わった途端、味が変わってしまった。隣席した千葉県袖ヶ浦から訪れた客が、「遠くから、わざわざ食べに来たかいがあった、老舗の味を堪能しました」と言ったが、老舗というブランドは、初めての顧客にとっては、その味が老舗の味であると信じ込めるだけの程度のものなのかもしれない。諏訪湖近辺でも、四万十川で天然鰻が採れば提供してくれる別の老舗もある。東京の浅草近辺にも老舗は多い。養殖では日本一を誇る鹿児島もあるし、浜松等の選択肢もある。味を売り物にする専門店での世代交代は、料理長の居る割烹旅館でも継続することが大変難しい。料理人が変わると途端に、味が継承できなくなるという、難しい事業体でもある。

現在の日本では、世襲の家督による職業が世代交代で行き詰まるのは、先代の「質」を継承できなかったか、相続税の仕組みによって、固定資産や貯蓄に税金が掛けられ、キャッシュフローが追いつかず、人為的に継続を断絶させられる憂き目にあうことで、起きている。現在の相続税の仕組みでは、ブランドのみの家督継承では3代世襲が、やっとならう。断絶は、参入障壁を低くするので、新しい参入者が増え、結果として多様性を増し、環境変化にあった技術革新も導入され、実用性を生み出すことにも繋がっているが、老舗を継承するのは、容易ではないことも事実である。

江戸時代の家督による継続性は、給与が米で支給される武士階級によって維持されていたので、借金は増大したが継続は名目として成り立っていた。米の石高制で縛られ、能力がなければ何代にもわたって昇給も叶わず、江戸幕府が崩壊するまで、翌年の米の収穫を前提にした石高による借金が、米蔵商人によって担保されることで可能となっていた。世界で初めての約束手形である「から米切手」は、米の収穫を当てにした石高制度が無ければ、生まれていなかったと思われる。江戸時代の地酒の蔵元は、地域の米を集めて年に3回納税するための貯蔵の蔵を持つ庄屋か、「札差し」

という金貸し業を営む米蔵商人の兼業であり、大阪堂島の株仲間米蔵商人と繋がっていた。各藩は、常に新田開発を行い石高を増やし、副業としての地域産業を振興し、宿場の近辺では薪を納め木銭宿がこれを売り、傳馬の宿場制度は、飼い馬による流通サービスを発展させ、社会制度を安定させていた。基本的に天候不良により米の収穫が収穫通減を起こさなければ安定しており、石高制の社会制度は世界的にも評価が高かった。

8.2 老舗の継承「陣屋」

神奈川県のアノ市鶴巻温泉にある割烹旅館「陣屋」が、DAIYAMOND ハーバード・ビジネス・レビューの2018年8月号『従業員満足は戦略である』で、女将自身が執筆して取り上げられた。創業100周年を迎え、客室20室ばかりであるが、個人向け客層のリピータが多く、有名割烹旅館としてのブランドが確立していた。老舗という伝統を継承するにあたって、事業内部を時代に合ったIT化によって変革させ、従業員数を1/3近くまで減らし、週休2.5日という荒業を実施して、従業員満足度も上げることができ、10億円の赤字を黒字化した、という成功物語の報告となっている。『最高のおもてなしは従業員満足度から生まれる』と題した論文は、自己変革に苦勞した従業員との関係を改善し、従業員満足度に焦点を当て黒字化した経緯を記述している。

事業経営として特筆できることは、「陣屋」のオペレーションを、ASP (Application Service Provider) サービスとして外販したことに革新性を見てとれる。詳しい記述はないが、外形的な模倣ではなく実質的な経営思考を現場で実践し、伝統を継続するにはどうすればいいのか、という事業ノウハウを、ITシステムとして外販している。経営としては、成功し続けなければならない自己革新を、経営者自身が経営責務として自らに課したことに、大きな意味が見出されそうだ。「陣屋コネクト」のASP事業は、全国300施設に提供しており、売り上げは、年に1億6000万円ある。

ASP事業の特徴は、造り上げたシステムプログラムを多人数で使えば使うほど、プログラムを構築したコストは容易に回収でき、回収後の新たな課金は、そのまま純利益になるという仕組みである。プログラムを使う

従業員数に毎月使用料を課金すれば、コスト回収後は、課金分は純利益として収益化できる。アプリケーションを利用する側は、使用料が毎月の使用人数分の課金なので、低額の変動費負担としてランニングコスト化でき、IT化のコストを自社開発投資しなくて済むため、大きなメリットが生じる。「陣屋コネクト」のプログラムも、Salesforce.com社のCRM（顧客関係管理）のクラウド型アプリケーション・プラットフォームを基盤にして動かしており、毎月課金による基本料金をSalesforce.com社に支払っている。「陣屋」のASP事業は、Salesforce.com社の割烹旅館バージョンとして、代理店のような役割も担っていると考えられる。

継続的な事業変革の方法論が成功して、割烹旅館の新しい伝統となるかどうかは、2018年10月に大規模改修工事が終わってからしか観察できないが、赤字から黒字になって、創業100周年の節目に、改修工事費の借入れができていたことだけは確かである。改修工事は、会席料理を提供していた池の上にある豊月殿・賑わい亭のレストランエリアと厨房施設、大浴場とトイレ等付帯施設、フロント横の帳場事務エリアまで、本館玄関と山側の客室を除いて、全ての改修工事を行っている。現在、割烹料理は、採算が合わず8年ほど前に閉鎖せざるを得なかった炭火焼レストラン源氏館で、提供し続けている。当時の炭火焼レストランは予約もせずに入れ、自分で焼くため価格もそれほど高くなく、時間の制約もなく、清潔で設備も充実していたので利用しやすかったが、来客数は少なかったため、その分赤字も増していたと思われる。源氏館のレストランは、本館客室庭園の崖下である本館玄関に至る庭の右側にあり、宮崎駿のアニメ作品「となりのトトロ」に出てくる大木のモデルとなった木の脇にある。

常識とは異なった事業展開は、2009年に借金まみれの老舗割烹旅館を素人夫婦が相続し、引き継がざるを得なかったことから、内部革新が始まったと、女将の報告にある。借金の相続が、大規模庭園の固定資産を相続する税の負担をやわらげたこともあったかもしれない。2か所に分かれていた厨房を1か所にするために、炭火焼レストランを閉鎖したという。人件費が赤字を生み、不平の塊になっていた120人のスタッフを、正社員30人パート社員15人に絞り、IT化により従業員のマルチタスク化を実現し、

平均給与も288万円から400万円へと改善したと、記述されている。

人件費だけでも、年間2億円5,000万円の赤字削減効果を生んでいるはずである。黒字化の最大要因は、固定費化している人件費削減であったと思われる。人件費の大幅な削減は、少ない人数で割烹旅館をどう動かすか、という課題解決に直面し、IT化と、週2.5日の休館日、に繋がったのではなかろうか。当然、経営の意思決定が無ければ、人件費大幅削減は実現できていない。現在、予約なしを受け付けず、休館日の宿泊と割烹料理の提供は自ら停止している。一般的には、顧客への継続的な「おもてなし」を守るには、サービス産業では休日を設定できず、ホテル業、旅館業、飲食関連業の大きな欠陥となっていて、どこでも解決できていない。

「陣屋」のロケーションは、丹沢山塊の大山の麓にあり、世界有数の温泉リゾートエリアの箱根湯本、強羅、芦ノ湖と競合する場所にある。小田急線の鶴巻温泉駅から徒歩2～3分であるが、新宿からロマンスカーを利用すれば箱根湯本の方が短時間で着けるし、車を利用した交通手段の便が悪く、高速道路のインターチェンジからは遠い。周りには観光名所があるわけではなく、大山の麓といっても、大磯海岸の山側といって差し支えない場所である。過去、割烹旅館としての機能は、政治家や財閥の別荘があった大磯を訪れる客を接待する場所として使われていた。

1918年の創業当時は、三井財閥の御寮である別荘として造られ、三井財閥の客を接待していたようである。昭和期に入った戦後も含めて、将棋と囲碁のタイトル戦が300回以上開催された場所として有名になった。小さなロビーには、鎧兜や宮本武蔵に所縁があるとされる刀なども展示されている。20年ほど前までは、ロビー脇の玄関を入ると、大きな陣太鼓で出迎え、歓迎の意を示し来客を館内に知らせていた。現在は、駐車場から庭に入る入り口で、予約した時間帯に、小さな陣太鼓を叩いて迎えてくれる。帰るときも送り出しの陣太鼓を叩いてくれる。庭は一万坪あるという、広大な庭を持っている。

「陣屋」を利用し始めてから45年ほど経つが、庭に面した風情のある景観を持っていた客室が、25年ほど前に埃っぽくなり始め、「おもてなし」の「こころ」は期待できなくなり、ブランドに頼るオペレーションだけと

なってしまった。この時期あたりから、顧客を失って、徐々に赤字化が始まったのではないだろうか。ブランドである割烹料理も、箱根のホテルが提供する季節料理の方が上である状態が目立ってきていた。隣接する旅館にも、鶴巻温泉というブランドが急速に衰退していく様子が見てとれた。鶴巻温泉で温泉に入って猪鍋を食べることができる、という伝統を継承することが、すでに、できていなかったのである。この時期に、「陣屋」は、炭火焼レストランを開設しているが、挽回には至らなかったと思われる。過去にあった伝統の実用性は経営者のみが知っているだけで、従業員は仕事の処理だけの役割しかなくなったように思われる。

温泉が湧き出ると言っても、鶴巻温泉には、隣接する旅館と、日帰り入浴の施設しかない。「陣屋」の地域は、東京や横浜の通勤圏でもあるため、駅前広場の整備が整ったこともあり、20年ほど前から、周りにマンションが立ち並ぶエリアとなってしまう、借景にマンションの建屋が邪魔をしている。玄関わきにある宴会場の池に面した「竹河の間」は、披露宴等の場所として使用されているが、外観が古びて物置のような建屋になってしまい、屋根の脇を玄関へと昇ると、折角の庭園の価値を損なっていることに気付く。

女将の記述に、従業員の最高年齢は庭師の83歳であると報告がある。83歳の庭師だけが、密かに伝統の実用性を保ってきたような気さえする。庭師は、誰も迎えに出ない駐車場で車の駐車位置に迷っていると、度々、手入れをしている木から降りて来ては、夏は木陰に、春は木の下を避けるように、案内をしてくれていた。庭は、一年中手を入れていても、手入れが追いついていないと告白していた。現在でも、追いついていない。豚肉のみそ漬けのお土産が、「陣屋」ブランドで密かに知られていたが、炭火焼レストランがオープンした頃に、なくなっていた。現在、再度、「陣屋」ブランドのお土産として復活しているように見える。事業の外部環境と内部環境のレジリエンスが、限界ギリギリのところ、立ち直りを見せた事例でもありそうだ。

女将は、“陣屋グループはいま、「陣屋EXPO」という新たなサービスを

立ち上げた。これは旅館同士のリソース交換ネットワークであり、「助け合いネットワーク」と呼んでいる。”“「陣屋EXPO」を始めた動機には、資本関係のない旅館同士で人材や食材、備品などをやり繰りできるようにすることで、業界全体を救いたいという思いがあった。³⁶”と報告している。「陣屋コネクト」を導入している旅館には、「陣屋」の料理長が出向き、地方の旬の食材を使った、地元ならではの料理の開発をお手伝いしている。この手法が成功すれば、「陣屋EXPO」が、機能してくる可能性がある。割烹旅館「陣屋」は、各地方の旬の食材を提供するという、付加価値の高い割烹旅館に、姿を変えることができそうだ。「陣屋EXPO」の参加者も、その恩恵にあずかれる物語が、できあがるかもしれない。

何が実用性のある伝統で、何が付加価値を生んでいて、何がコスト増になるのか、黒字化したこれからが楽しみである。革新性による継承を検討するうえで、「陣屋」の例を観察すると、J.アタリがいう、「偶然による突然変異が多様性を生み出し新たな環境においても決定的な特徴をもつ」という、外部環境が産業革命にIT革命が加わった世界で、IT化の環境変化を自事業にフィードバックを掛け、自己改革をして、今までの常識とは異なったDNAによる突然変異を生み出し、新たな伝統を継承する可能性が高い、という老舗を家督する事業体のあり方をイメージできそうだ。

9. おわりに

過去の伝統が、現在でも伝統として継承されているのは、伝統を取り巻く外部環境と、伝統の内部環境にある本質との間に、時代の進化を越えて、相互に継続性が保たれる最適なフィードバックが掛かっているからであると考えられる。継続性は、交換様式から客観的な伝統の外形から判断できる実用性と、伝統の内部にある共同主観性を持つ心象による本質がもつ価値観から判断できる実用性とがある。外形的な実用性は、その時代だけに

³⁶ 宮崎知子 (2018,8)、『最高のおもてなしは従業員満足度から生まれる』、DIAMONDハーバード・ビジネス・レビュー、2018年8月号、76

交換様式が可能となっていて、単に経済効果を発揮していただければ、外形は時間とともに劣化するので、伝統は継承されにくくなっていくと思われる。

宗教が劣化を起こさないで継承され継続するのは、伝統の内部にある共同主観性を持つ心象による本質が、時代の進化にレジリエンスを発揮し、本質の概念を時間の進化に合わせ込めるフィードバック機能を持っているからなのではないだろうか。伝統を継承できているレジリエンスでは、本質の価値観を時代に合わせ革新し、変容させ、外形への再投資を可能とする仕組みが、体系の中に組み込まれていると考えられる。日本における継続性のある伝統文化を観察すると、外形より心象や本質の概念化が可能になっている伝統が多く見られる。継承には「師承」のような形で、伝達、伝承、伝播が可能になっており、外形の持つ過去の本質を維持しながら、現在の外形を現時点での外部環境に合わせ、適切なフィードバックが掛かる様に、心象にある本質を変革し、継承を実現していると思われる。

適切なフィードバックが掛かり継続性を維持できたということは、実用性が発揮できていることの証明でもあるだろう。実用性が無ければ、伝統は共同幻想であったかもしれず、人類にとっての有用性は特別な環境であったその時代背景にしか実用性を持たず、形骸化した伝統の歴史物語として残されているか、遺跡となっているだけだろう。

日本における会話態と文章態の「ことば」の変遷や標準化は、革新性を持った概念化に、大きな役割を果たしてきたと考えられる。「わび」「さび」、「ハレ」「ケガレ」等々、その多くは、外形の継続性は概念化が可能となる「ことば」の付属物であってもいいような、人間の本質を継承できる伝統内部の重要な位置を占めているようである。日本の「ことば」が持つ、「共時態」と「通時態」を同時に感じとれるという特徴から生まれてきているのかもしれない。

伝統の継承を観る上では、外部環境と内部環境の間で、進化を共有している「共時態 (Synchrony)」的な多様性 (Variety) と、経路依存性を個別に持つ「通時態 (Diachrony)」的な多様性 (Diversity) が、外部と内部の間で、適切なフィードバックがなされているかを観察することが、重要

な視点となるであろう。伝統の継承において、その本質が持つ概念を、時代に合うように変えるには、革新性を持つ思考が必要不可欠となる。これから出現するAI（人工知能）による環境変化に、「あるべき姿」として伝統が実用性を発揮するには、伝統の中に在る本質の概念をどのように進化させていけば良いのか、課題は残っている。

「師承」制度から伝承を考えると、伝承が有効に引き継がれる期間は、どうやら10年程度が必要であり、逆に言えば、現在の中国のように、伝統を人為的に造り出すには、10年程度でよいということかもしれない。強制力を持つ中国の人為的な伝統の物語創出は、すでに10年を経て実効支配が既存になりつつあり、共同幻想が実用性を生み出せば、革新性をもった伝統となる可能性がある。ポスト資本主義で議論される、財源も検討せず、貧富の格差是正策として単純化したベーシック・インカム論は、機会均等ではなく分配均等であるため、絶対権力が必要だと結論を得てしまう。

もし、革新性を持たず、実用性を欠く伝統が継承されるとしたら、どんなことが起きる可能性があるのか、集団的幻想が外部環境からフィードバックを受けたらどうなるのか、均衡を目指す幻想はどうなるのか、人為的な実用性を強制力として持ったらどのような社会環境を生み出すのか、今後も考えておく必要があるようだ。

AI（人工知能）の時代に入り、伝統が継続し、再生可能なレジリエンスを獲得するには、「量」ではなく「質」が必要不可欠であり、「質」は情報の「知識化」によって獲得できそうである。「ことば」による概念化は、「知識化」そのものであるが、残念ながら、まだ、我々は「質」の経済学を手に入れていない不都合な社会環境に居る。ノウハウという「知識化」が必要な伝統の継続性を維持する革新に対して、「われわれは何をすべきか」という問いは、常にしておかなければならないだろう。

実際の事業経営の現場での伝統はどのように継承されているかを観察するために、小規模な家督継承の例と、DIAMONDハーバード・ビジネス・レビューに掲載されたサービス産業の割烹旅館「陣屋」を取り上げて、老舗という伝統の継承事例を取り上げてみた。長中期的な視点からの検証はできなかったが、「知識化」が老舗の継承を実現している可能性が高いと

ころまでは、定点観測から観察できたように思う。

伝統にはストーリー性が必要なことは分かったが、伝統が持つコンテンツは、どのように実用性に相関しているのか、環境との多様性の変化との間にどのようなフィードバックが掛かっているのか、それを時間軸で観察すると歴史的な因果性まで影響を及ぼしているのか、時代を実体験できないという「共時態」と「通時態」の限界から、考察はできたが検証はできないという、因果関係の壁にぶつかってしまった。実用性を持続させる革新性は、偶発的にたまたまの連続で起きていたのか、もし革新が偶発的であったのなら、なぜ偶発が起き得たのか、詳細な検証はできずのまま、課題を残してしまった。伝統のコンテンツは、外部環境からの観察だけでは、主観的にも客観的にも、内部をうかがい知ることは難しい。

コンテンツの「塊」ともいえる月刊誌『文芸春秋』が、1923年1月に菊池寛によって創刊されてから、2018年1月で95周年を迎えている。これを節目に創刊95周年の特集を編集した。伝統的な編集方法や対談などの手法、小説の扱い、政治的には「穏健な保守」等々について、多岐にわたる人々が、寄稿している。ノンフィクション作家の澤地久枝（87歳）氏は、“九十五年は、長い。個人であれ、社会であれ、予想もしなかった事態に出会う。それに耐えて、そこから新しいつぎの道をつかみとり、また堂々と生きなければ、九十五年にはならない。³⁷”といみじくも指摘している。「新しいつぎの道をつかみとる」という革新が、伝統の実用性を継続させる大きな要因なのかもしれない。

新しい次の道が、AI（人工知能）による「通時態」的な、あるいは「共時態」的なビッグデータの特徴量の相関性から、予測し生み出せるとも思えない。過去と同じ経路依存性が、将来も継続してくれるとすれば、新しい次の道への選択肢から最適解が得られる確率は上げられるかもしれないが、残念ながらAI（人工知能）は、未来のストーリーを概念として描く能力を持つことは、シンギュラリティが訪れても、無理であると思われる。

³⁷ 澤地久枝（2018,1）、『人生の九十八年』、文芸春秋、新年特別号（創刊95周年記念）、333

AI（人工知能）は、特徴量から外れている人間が持つ五感による概念化はできないし、創出したノウハウも検証できない。

現在のSNS（ソーシャル・ネットワーク・システム）による情報拡散は、物理的な媒体を介さず、AIが言語を翻訳してくれれば、コミュニケーションを可能とする道具によって、理論的には、どこまでも拡散できる。グローバリズムは、インターネットという情報革命によって、国境や集団の枠組みからの強制を崩壊させ始めている。一方、国家資本主義により覇権を進めている国家や集団や人々は、自分達の集団が構成しているコミュニケーションのネットワーク以外で伝承されている伝統には、「質」という心的な拠り所があることについて、関心はなさそうである。

伝統を継承するには革新性は必要であるが、革新度が加速して、外部環境の変化が大きくなるとフィードバックによって、伝統を取り巻く環境が瞬く間に加速して、伝統を内包した環境そのものが臨界点であるティッピングポイントを迎えてしまう可能性もある。地球温暖化の現象は、人類が経済を拡大する過程で生まれてきた問題である。ポスト資本主義の世界では、ベーシック・インカムが地球温暖化を解決してくれるという物語には、繋がりそうにない。シンギュラリティが取りざたされる情報化社会の急速な変化に、失業者が増えると断定して、失業者保護のために消費循環を生み出すはずの社会という、財源を考えず、資本主義のままの経済論の延長線上で、経済性を確保できるという幻想を持つベーシック・インカム論は、無責任でもある。経路依存性を持つ伝統的行動に、将来ともに、人類が期待する結果としての因果性を生み出せる知恵を、我々は現時点で持っているかどうか、疑わしい。

参考文献

日本語文献

- [1] 赤尾兜子・司馬遼太郎（1978）、（2006、4）、『日本語の本質』、文春文庫

- [2] 網野善彦 (1997, 4)、『日本社会の歴史』(上)(中)(下)、岩波新書
- [3] 河合隼雄 (1987)、(2018, 4)『影の現象学』、講談社学芸文庫
- [4] 加藤貴・校注 (2015, 2)、朝野新聞 (1893・明治26年)、『徳川制度』(上)(中)(下)(補遺)、岩波文庫
- [5] 司馬遼太郎 (1996, 9)、『この国のかたち』(一)～(六)、文芸春秋
- [6] D,キーン (1973)、(2002, 9)、足立康訳、『果てしなく美しい日本』、講談社学術文庫
- [7] D,キーン・司馬遼太郎 (1972)、(2006, 7)、『日本文明のかたち』、文春文庫
- [8] 吉田元 (2016, 12)、『江戸の酒』、岩波現代文庫
- [9] 吉本隆明 (1982, 1)、『共同幻想論』、角川学芸出版
- [10] 柳田国男 (1911)、(2017, 2)、『被差別民とはなにか』、河出書房新社
- [11] 柳田国男 (1942)、(1969, 8)、『日本の祭』、角川ソフィア文庫

外国語訳書文献

- [12] Claude Levi-Strauss “*La Pensée sauvage*”、Paris, Librairie Plon (1962)、(C, L, ストローヌ、(1976, 3) 大橋保夫訳『野生の思考』、みすず書房)
- [13] Henri Poincaré “*La Science et L’Hypothèse*” (1902)、(H, ポアンカレ、(1938, 2) 河野伊三郎訳、『科学と仮説』、岩波文庫)
- [14] Hayden White “*THE PRACTICAL PAST*” (2015)、Northwestern University Press (2014)、(H, ホワイト、(2017, 10)、上村忠男訳、『実用的な過去』、岩波書店)
- [15] Isabella L. Bird “*Uneaten Tracks in Japan*” (1880)、(I, L, バード (1885)、(1973) (2000, 2) 高梨健吉訳、『日本奥地紀行』、平凡社ライブラリー)
- [16] Jacques Attali “*PEUT-ON PREVOIR L’AVENIR?*” (2015)、Librairie Artheme Fayard、(J, アタリ、(2016, 9) 林昌宏訳、『アタリの文明講義論』、ちくま学芸文庫)

- [17] Jared Diamond “*COLLAPSE*” (J,ダイヤモンド、(2012, 12) 榎井浩一訳、『文明崩壊』(上)(下)、草思社文庫)
- [18] Jean-Paul Sartre “*L’Existentialisme est un humanisme*” (1946)、Editions Nagel、(J-P,サルトル、(1955, 7) 伊吹武彦・他訳、『実存主義とは何か』、人文書院)
- [19] Martin Ford “*RISE OF ROBOTS: Technology and the Threat of a Jobless Future*” (2015)、First Published in United States by Basic Book, a member of the Perseus books Group (M,フォード、松本剛史訳『ロボットの脅威』、日本経済新聞社)
- [20] Paul Mason “*POSTCAPITALISM*” (2015)、EXARCHIA LTD C/O Aitken Alexander Associates, Ltd. (P,メイソン、(2017, 10) 佐々とも訳、『ポストキャピタリズム』、東洋経済新報社)
- [21] Peter F, Drucker “*POST-CAPITALIST SOCIETY*” (1993)、Harper Business, A Division of Harper Collins Publishers Inc. (P,F,ドラッカー、(1993, 7) 上田惇生・他訳、『ポスト資本主義社会』、ダイヤモンド社)
- [22] Ruth Benedict “*The Chrysanthemum and the Sword — Patterns of Japanese Culture*” (1946)、Houghton Mifflin、(R,ベネディクト、(2008, 10) 角田安正訳、『菊と刀』、光文社)
- [23] Thomas L, Friedman “*THANK YOU FOR BEING LATE*” (2016)、ICM Partners、(T,フリードマン、(2018, 4) 伏見威蕃訳、『遅刻してくれてありがとう』(上)(下)、日本経済新聞出版社)
- [24] Thomas Pink “*FREE EILL : A Very Short Introduction*” (2004)、(T,ピンク、戸田剛文・他訳 (2017, 12)、『自由意志』、岩波書店)
- [25] Yuval Noah Harari “*SAPIENS : A Brief History of Humankind*” (2011)、Yuval Noah Harari、(Y, N,ハラリ (2011)、(2016, 9)、柴田裕之訳、『サピエンス全史』(上)(下)、河出書房)

日本語論文

- [26] 澤地久枝 (2018, 1)、『人生の九十八年』、文芸春秋、新年特別号 (創

刊95周年記念)

- [27] 宮崎知子 (2018, 8)、『最高のおもてなしは従業員満足度から生まれる』、DIAMONDハーバード・ビジネス・レビュー、2018年8月号
- [28] 畑中邦道 (2008, 6)、『研究開発戦略と経営の意思決定』、国際経営フォーラム No.19、神奈川大学 国際経営研究所
- [29] 畑中邦道 (2010, 7)、『曖昧とグローバル環境—「曖昧」と「YES・NO」による経営の一考察—』、国際経営フォーラム No.21、神奈川大学 国際経営研究所
- [30] 畑中邦道 (2011, 7)、『日本の競争力「ジャスト・イン・タイム」—震災後の東日本の復興と協働—』、国際経営フォーラム No.22、神奈川大学 国際経営研究所
- [31] 畑中邦道 (2012, 7)、『国際物流と比較優位—環境の構造と日本企業の特殊性—』、国際経営フォーラム No.23、神奈川大学 国際経営研究所
- [32] 畑中邦道 (2013, 11)、『ビックデータとグローバル』、国際経営フォーラム No.24、神奈川大学 国際経営研究所
- [33] 畑中邦道 (2015, 1)、『価値を発信する地域は、世界にルールを強制するか?』、国際経営フォーラム No.25、神奈川大学 国際経営研究所
- [34] 畑中邦道 (2015, 12)、『創出と継続』、国際経営フォーラム No.26、神奈川大学 国際経営研究所
- [35] 畑中邦道 (2016, 12)、『AIの進化と事業リスク』、国際経営フォーラム No.27、神奈川大学 国際経営研究所
- [36] 畑中邦道 (2017, 12)、『事業活動と経営理念』、国際経営フォーラム No.28、神奈川大学 国際経営研究所